

ソード・アート・オンライン デュエル・オブ・オナー

TTオタク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

SAOプレイヤーの一人であるモニカは、アキラの裏切りによって、親友であるノンナを失ってしまふ。さらには、アキラ一派に強要された殺人の罪を問われて、有力ギルドの幹部たちを集めた裁判で審判を受ける事になった。

しかし、血盟騎士団で剣術指南役をしているダニエーレという男が、牢獄から出す代わりにアキラを殺せと持ちかけ、モニカはそれに乗る。

ダニエーレは契約通りに裁判にてアキラの怪しいところを突き容疑者とし、怪しい者同士で決闘し、勝者を無罪とする決闘裁判を提案する。

それが受理され、モニカは決闘裁判へ挑む事になる。

目次

裁判①	戦乙女、裁判を受ける	1
裁判②	道化、もとい剣士	6
訓練	剣術とは学問である	13
食事	食事、そして出会い	18
鍛冶	戦支度は最上に	24
怨敵	戦乙女と世界蛇	31
邂逅①	全ては必然の上	37
邂逅②	同士だが同志ではない人	44
邂逅③	過去からの最後通牒	54
過去①	セピアに褪せた過去	60
過去②	正直者は馬鹿を見る	66
過去③	一騎当千の技量あれど、その精神は	71
過去④	平穩の落日	77
過去⑤	色彩の消えた日	83
脱出	本質と運命の分かれ道について	94
異常	愛に理由がないように……	99
殺人①	死について回るもの	107

裁判① 戦乙女、裁判を受ける

私はまず両足を肩幅に開いた。そして右足はやや前方。敵に向かつて体は真っ直ぐに立てる。剣を持つ右手を頭上に持っていていき、切っ先を字面に向けてそのまま右肩から左膝に向かうように構える。

——集中して。呼吸を整えて。

これが私の構え。この浮遊城アインクラッドに閉じ込められた私が好きで使う片手剣の構えだった。

しかしその手に剣は無く、ここはフィールドでも迷宮区でもなく、圏内にある薄暗くカビ臭い地下牢であった。カビ臭い空気が、私のやる気をヤスリのように削る。

——だめよモニカ。しゃんとしなさい。やると決めたことはやり通す。それがおばあちゃんのお教えでしょ。

そう自問し、再び集中する。こんな場所でもやれる事はある。私は体に染み付いた動きを反復し、動きを忘れないように、より効率よくこなせるように磨いていく。

型の練習を繰り返していると、頭上からガチャガチャと耳障りな金属音が私の耳に届いた。

——マズい、看守だ。

私は居住まいを正し、背もたれのない椅子に座った。程なくして全身鎧に身を包んだ看守がやってきた。

「出る。時間だ」

アインクラッド解放軍（ALF）の派遣した看守は随分と私を警戒した様子だった。手に槍を持ち、なるべく高圧的な態度で私を牽制しようとしている。しかし僅かな声の震えが隠せていなかった。

私は逆らわずに牢を出る。すると、通路の脇に控えていた者たちが私の身動きを塞ぐように槍を向ける。私を中心とした円陣の槍衾やりいすまが敷かれた。

「振り返らず、急な動作もせずゆっくりと進め」

私は指示通りゆっくりと歩く。まるで爆発物か化学兵器のような扱いだ。ここ数日で慣れたものだったが、愉快なものではない。

前の槍に触れないようにゆつくりと、しかし後ろの槍に刺されないようにできる限り速く歩く。それでも時折腹部に発生する切り傷の異物感は一囚人生活を送る私のストレスを大幅に増幅させていた。

そして階段に差し掛かり、私が速度を落とした瞬間、ひととき大きな違和感と衝撃が私の腹部を貫いた。

「っー」

私はそのまま姿勢を崩して階段に倒れこんだ。

「おつと悪い悪い。急に速度落とすもんだから刺しちまったぜ」

私を呼び出した看守とはまた別の軽薄な声。その口調からは微塵の反省の色も見受けられない。

「今抜いてやるからな。よつと」

右肩に衝撃が走る。私は声が出ないように、唇を噛んで耐えた。足で私の体を固定して槍を抜くという名目で私を足蹴にする。いつもの、慣れた虐待だった。

周囲の看守たちは黙ったままだ。それもそうだろう。彼らにとっては私は憎き同胞の仇だ。その仇が暴行を受けていたところで、誰が止めに入るものか。

やがて槍が抜け、足蹴にされた状態から解放されると、再び槍衾に囲まれる状況になった。

私を足蹴にしていた軽薄な声の男が言う。

「おらさつさと立てよ人殺し。殺されてないだけありがたいと思えよ」

半笑いの声。前々からわかっていたが、この男だけは私への恨みゆえの虐待ではなく、単に楽しみとしていたぶっているだけらしい。——このカス野郎が。覚えてなさい。自由の身になったらアンタの身ぐるみ剥いでやるんだから。

しかし、私は耐えるより他ない。今から始まる〈裁判〉へ向けて、弱点となり得るような欠点を晒してはならなかったのだ。

私はどうにか立ち上がり、看守の誘導する先へと向かった。

†

そうして私は25層の血盟騎士団(KOB)本部へ通された。場所

は大きな会議室。いや、会議室というにはやや高圧的な半円状のテーブルが入室者を待ち構える部屋だった。

「モニカくん、よく来てくれた。席にかけたまえ」

そう発言したのは、半円のテーブルの中央を陣取るこの裁判の主催者である血盟騎士団の団長、ヒースクリフだった。

——相変わらず人間味のない人。

「はい、失礼します」

私は軽く一礼し、半円の中心にある席に座る。私の真正面に血盟騎士団の面々が揃い、右手側には聖龍連合（DDA）のメンバー。左手には解放軍のメンバーが顔を並べていた。いずれも幹部クラスのメンツである。

思ったよりも遥かにまともな裁判所だ。その関係も崩壊したとはいえ、かつて二大派閥を形成し争った解放軍と聖龍連合が一堂に解しながら静粛を保った議場に仕上がっている事がヒースクリフのホストとしての有能さを証明していた。

髪の毛の落ちる音さえ聞こえそうな静寂の中、ヒースクリフは普段通りの冷めた重低音を響かせて話す。

「会議を始める前に諸君に問いたい。今回の会議の議題はモニカくんの罪を精査し、罰則の内容を決める。そして、アキラくんの動向について明確な情報を共有し、彼がレッドプレイヤー達と繋がりがいないか証明する。この二つで違いはないかな？」

会議、と銘打ってこそいるが、これは事実上の裁判であった。ヒースクリフは言っていないが、この会議は私ことモニカの殺人の罪を追求し、解放軍の私刑を許可するかが議題に含まれている事を看守の口から聞いていた。

即座に右手、聖龍連合のリーダーが声を上げる。

「ヒースクリフ。この会議を始める前に言っただろう。アキラは無罪だ。彼はモニカ等レッドプレイヤーに襲われた被害者なんだ。彼を疑うなんてどうかしてる」

その発言を、今度は中央の声が諫める。

「クライムさん。ここは情報を交換し互いの認識を一致させる場で

す。あなたの主観を主張する場ではありません」

冷たく、そしてよく響く女性の声。血盟騎士団副団長のアスナの声だ。わたしを除けばこの中で唯一の女性でもある。

「まあ、確かにそうだな。悪かった」

クライムと呼ばれた男は大人しく引き下がった。

その後は反対を示す者がいなかったため、ヒースクリフは会議開始の音頭をとった。

「問題がなさそうなので進める。まず初めにモニカくんの口から当時の状況の説明を願おう。頼めるかな？」

決して命令しない。その態度に私は違和感を覚えた。例えばグリーンプレイヤーを手にかけたレッドなど即座に断罪されて然るべきなのに、ヒースクリフは私を罪人として扱っていないような雰囲気を感じた。

——ひよつとして、血盟騎士団は私の側についてくれるのかしら。

それだつたら心強いことこの上ない。予定通り私はヒースクリフの言う通りに説明を行う事にした。

「はい、簡単に説明させていただきます。私は当時、私の友人のノンナとパーティーを組んで行動していました。そこにアキラ率いるパーティーが同行を要請してきました」

決して誇張はしない。下手な誇張は弁護側に疑念を生じさせる事になる。

「私たちはアキラ達とパーティーを組む事を了承し狩りを行っている」と、レッドプレイヤーの襲撃を受けてしまいました。それでアキラ率いるパーティーは麻痺をくらって戦闘不能になり、私とノンナだけが残っていました」

思い出すだけで手が震える。思えばあの時に一瞬でも気を抜かなければ私はこんなところに立ってはいなかったのだ。

「私たちは背中合わせでレッドプレイヤーと戦いました。対人訓練は積んでいましたし、ノンナとは長いペアだったのでレッドプレイヤー達のHPバーがレッドゾーンに突入する程度には優勢に戦えていま

した」

——ああ、本当におぞましい。今すぐにも殺してやりたい。あいつさえ居なければ今でもノンナは私の隣に居たのに。

私は震える唇を噛む。現実世界だったら血が出ていそうな、そのまま噛みちぎってしまいそうなほど強く噛んでいたが、電子上の仮想世界にあるこの体は一滴の血も流さないままだ。

「それでも、私たちは皆さんがご存知のようにレッドプレイヤー達に監禁される事になりました」

——モニカ、覚悟を決めなさい。今から私は、一族の名誉をかけて戦いを挑むのだから。

胸いっぱい空気を吸い込み、はつきりとした発音で私は言う。

「それはアキラが、青龍連合の幹部であり私たちとパーティーを組んでいたアキラが裏切り、ノンナへ攻撃したからです」

私は、ただ毅然と前を向いた。

裁判② 道化、もとい剣士

私の証言が終了し、監禁後から救出までの情報がまとめられた。そしてヒースクリフが口を開く。

「つまり情報をまとめると、モニカくんはアキラくん率いるレッドプレイヤーの襲撃に遭い監禁され、見せ物として望まぬ殺し合いをさせられてしまい、解放軍と青龍連合所属のプレイヤーを殺害したのはそれが理由である。後は救出隊の報告通りだと。そういう認識で構わないかな？」

「はい、問題ありません」

私はうなづく。とりあえずは私の言葉が全て黙殺されるような事態にはなっていないかった。少なくともヒースクリフは私の発言を真摯に取り合い、議題にすべきと認識しているようだった。

しかし全員が納得していたわけではない、自分のギルドの幹部がレッドプレイヤー扱いされたクライムだけでなく、自分のギルドの構成員を私に殺されたキバオウは納得がいていなかったようだった。

「ヒースクリフ。発言してもええか？」

「かまわない」

キバオウが口を開く。

「なあ、モニカ。お前の発言をまとめると、自分は正当防衛だから見逃して下さいと言うとるように聞こえるが、これはワイの聞き間違いか？」

キバオウの言葉は重々しく、腹の底に溜め込んだ呪詛じゅそと怒りの粘り気を含んでいた。

「いいえ、私に罪がないとは言いません。しかし、あなた方にそれを裁く権利は無いと私は思います。正当な政府が存在せず、正当な法の無いこのインクラッドでは、どのような裁きも所詮醜いリンチに過ぎません。私を罰するというなら貴方自身もレッドプレイヤーの同類と化すだけです」

瞬間、部屋の空気が変わるのがわかった。キバオウの激怒はそれほどまでに大きく膨らんでいた。

キバオウは机を強く叩き、怒鳴った。

「ふざけんなや！ ワイらに裁く権利が無いと？ 救出隊がお前のアイコンに変化したアイコンを確認しとる。それが動かぬ証拠やろうが。他に生存者がいないのを良いことに被害者説をでっちあげ、被害者ぶるなんぞちゃんちやらおかしいわ。恥を知れ恥を！」

——— 確証も無いのによく言うわ。これじゃ話は全く通じそうにないわね。

私は口内で舌打ちをする。この手の輩は議論すら成り立たないだろう。だが、言葉を発さないわけにはいかなかった。

「生憎、恥の文化は日本人でない私には理解しかねますね。同調圧力による脅迫と受け取ればよろしいでしょうか？ あと私は嘘を言っていないません。キバオウさんは私に何を望んでいるのでしょうか、はつきり口に出してください」

すると、キバオウは間髪入れずに答えた。

「死刑や！ うちの団員殺しとるんやから死をもって償うのが当然やろうが！ それにお前は無実の人間を5人も殺しとる。リアルでも死刑確定の重罪や。文句はないやろ」

私は呆れてため息をついた。やはりこうだろうとは思ったが、やはりやるせない気分だった。

私とキバオウが黙っていると、好々爺こうこうやと言った風の声が割って入った。

「発言よろしいですか？ 団長」

ヒースクリフが首肯する。発言許可を求めたのはヒースクリフの左に座る人物。血盟騎士団で剣術指南役を務めていて、対人戦部隊を率いるギルドのナンバー3と噂される人物だった。

「なんやダニエーレ。貴族主義が高じてまたレディーフアーストか？」

キバオウが剣呑な声を飛ばすが、ダニエーレは気にした風も無く答える。

「落ち着かれよキバオウ。貴方たちの要求はわかったし、青龍連合の意見もだいたい見当がつく。アキラ氏の無罪を要求すること

でよろしいな？」

ダニエーレはクライムたちに話を向ける。

「ああ、問題無い。アキラはレッドとは無関係だ」

ダニエーレはしばし頷いた後、穏やかな口調で言った。

「さて、この裁判の様相は実のところある時代の裁判に似通ってしまっている。私にはそれがチラついてしまって解決策を口にしたいと考えてうずうずしていました」

「なんや、もったいぶらずにはよ言えや」

キバオウの言葉に答えて、ダニエーレが口を開く。

「中世の裁判にそっくりでしてな。お互いの証言に確証もなく、事件が起こった事だけが事実としてはつきりしている。誠に厄介な事例であります。ですが、この事例に則れば裁判の解決策が二つあります」

ダニエーレは席を立ち、私のそばまで来て、全員の視線が集中する位置に立った。

「まず一つは神に判断を委ねる事、いわゆる神明裁判というやつですな。手足を縛り池に放り込む、もしくは熱湯の中に手を入れて火傷しないかを確かめるなどが例に挙げられますな。この案を皆様はどう思われる？」

するとクライムとキバオウはほぼ同時に答えた。

「論外やー！」

「ああ、論外だ」

それもそうだろう。ゲームであるこの世界で熱湯に手を入れれば圏外であればダメージは必至だし、水中に沈んだままだったらスリッパダメージで死に至るのは目に見えてる。ただの処刑にしかならないだろう。そもそも拘束用のロープなど、一部例外を除かねば存在しないが。

二人の反応を見てまた頷いたダニエーレは二つめの案を言う。

「ならばもう一つしかありませんな。二つめの案というのは剣に生き、剣に死ぬ皆様にはちようど良い案でございます」

大きく間を取って、ダニエーレは言う。

「決闘裁判をするのです。その名の指す通り、デュエルの完全決着モード。さらにその中の互いの条件が同じとなるフェアモードで決闘し、勝った方が無罪とするものです」

一同は面をくらう。正確にはこうなる事を知っていた私とヒースクリフ以外がその内容に驚いていた。

驚いて反応が遅れたクライムだったが、キバオウと違いあくまで理性的な反応で反論する。

「正直同意しかねるな。アキラは無罪だ、同意する理由がない」

「そうや！ 人殺しに慣れたレッドが世に放たれてしまうやんか！」

キバオウがそれに同意する。

一拍おき、ダニエーレはその言葉に答える。

「いえいえ、これは貴方たち両方にメリットがあるのですよ。まずクライム。貴方は今回の騒動がどれほどアインクラッド中に知られているか知っておりますかな？」

ダニエーレの言葉に、クライムはやや困惑した様子で答える。

「それは上から下までトップニュースとして知れ渡っているだろうな」

「そうですね。ニュースに興味のあるプレイヤーは全員がこの事件を知っているでしょう。それと同時に、アキラ氏の疑惑についても皆ご存知であります。レッドプレイヤーに捕まっていながら殺されもせず、かと言って他の被害者のように決闘をさせられていた訳でもない。誰も殺さず、グリーンのままだった。これは些か不可解ではありませんんかな？」

もつともな指摘だ。この事件を追っていれば誰もが思い当たる疑問である。この指摘に、クライムは若干狼狽うろたえする。

「だからなんだと言うんだ。殺してい、グリーンだったというのは事実じゃないか」

「ええ確かに、救出時はグリーンでした。ですが、アキラ氏のフレンドの中に、事件当日に彼のアイコンがイエローになっており、その後向こうからフレンド欄から消されたとの報告がありましたな。これは少々看過しかねる内容なのでは？」

「ただの証言だろう。いくらでも嘘は並べられる」

クライムの言葉に、ダニエーレはニヤリと笑う。

「ええそうでしょう。まったくもってその通り。しかし、他の事件を追っているプレイヤーはそう考えますかな？」

「何ッ！」

クライムの顔が驚愕きょうがくに染まる。しかし、すぐにそれを振り払った。「それは関係ない。そこまで事件に詳しい情報が出回るわけがない。知らなければ何も起こりはしないはずだ」

するとダニエーレは大仰に額に手を当てて言う。

「いや嘆かわしきかな、人の噂は巡るのが早い。誰かが情報を買ったのか、どこぞのネズミがこの事を記事にして売り払ってしましてなじきにインクラッド中の常識となるでしょう」

ネズミとは言わずもがな情報屋の《鼠》のアルゴである。彼女は有能な情報屋で、私もよく利用していた。

クライムは声色を憤怒に染めて言う。

「ダニエーレ貴様、情報を買ったな！ アルゴは不確かな情報は売りはしない。確かな情報源から得た情報が元のはずだ。貴様よくも」

「いやはやクライム、貴方らしくもない。少し落ち着かれよ。まあ確かにそのフレンド殿に誰かしらが情報屋に売れば金になるとアドバイスしたかも知れませんが、この裁判にそれは関係ありますかな、いやありますまい。情報源は御自分で確かめになさると良い」

クライムは音がしそうなほど歯を噛み締めて黙る。そこにダニエーレは言葉を続けた。

「さて。こうなるとアキラ氏は御自身で下らない噂話で被った不名誉を払拭せねばなりませんまい。互いの名誉をかけた、正しく高潔な場で、潔白を証明できねば今後長きにわたってアキラ氏と、その所属ギルドである青龍連合を苦しめる事になりますよ。そう考えますと、尋常なる決闘にて自身の無罪を証明するというのは、そう悪い事ではないのでは？ それに、モニカが殺害したプレイヤーには青龍連合のプレイヤーも含まれています。敵討ちという名誉も背負えますぞ。いかがですか？」

「も、持ち帰って議論する」

それを言ったつきり、クライムは会話は終わったと黙ってしまった。それを決闘裁判への肯定と受け取ったであろうダニエーレはキバオウに向き合う。

「さてキバオウ。決闘裁判のメリットについてですが、死刑を望む貴方にもメリットはありますぞ」

「ほう、言うてみろや」

キバオウは腕を組み、聞いてやっていると言わんばかりの態度で言う。

「まず決闘での死は私刑ではなく、神聖な結果として処理され、貴方が不名誉を被ることはありませんのでな。であれば、モニカの死を望むと言う希望にそいましょう」

その言葉に、キバオウは眉を釣り上げて言う。

「なんでや！　ワイは死刑にしろと言うたんや。それやと確実に殺せないやんか！　お前はレッドが世に出てええんか！」

矢継ぎ早に発せられた言葉に、ダニエーレは余裕を持って鷹揚に、嘲るように言う。

「いえいえ滅相もない。私めは単に貴方の解放軍を案じているのですぞ」

「なんやと？」

「いえ、25層の攻略時に喪失した支持率と結束力は未だ取り返せていないと見えましたな。別ギルドを吸収合併して別派閥を抱えている上、求心力を失っている貴方が強権を振るい、無罪かもしれない女性を処刑台送りにしたとあっては大問題になりました。貴方に昔からついてきてる部下は貴方の行動を絶賛するでしょうが、シンカー氏についてきていたプレイヤーはどう思いますかな？　彼らは過激派ではないようですし、貴方の強権を振るう姿に聞き感を覚えないとも限りません。ギルド外の批判もありましょう。そんな中、クーデターの大義名分を得たシンカー氏がよもやよもや、と言うこともあり得なくはないのでは？」

ダニエーレはあくまで提案するように、しかし事実上の脅しをキバ

オウに突きつける。キバオウは心当たりがあるのか、黙り込んでしま
う。

「その点、決闘裁判は良い。貴方の同胞の無念も晴らせますし、あくま
で当人間の同意によって行われた結果なので貴方が不名誉を被るこ
とはありません。それに、決闘裁判は準備期間がありまして、決闘
を行う者に武術を教える期間があります。そこで貴方はアキラ氏を
支援し、モニカを討てば良いのです。そう、悪い案ではないと思いま
すが。いかがですか？」

キバオウは唸った後、言う。

「わかった。乗ったるわ。青龍連合が決闘に乗るって言うなら、ワイ
らが支援する。それでええんやな？」

「ええ問題ありません」

ダニエーレは再び全員の注目を集める位置に立ち、言った。

「さて、最後に団長。私めの提案をどうお考えになりますかな？」

ヒースクリフは短く、予定していたように一言。

「私は賛成する」

そう答えた。

「これで残るは青龍連合の同意のみですな。では皆さま、決闘の時期
は青龍連合の同意が成立し次第、一ヶ月後といたしましょう。よろし
いですか？」

沈黙が続く。ダニエーレはこれを肯定と受け取った。

「ありがとうございます。これで私の話は終わりでございます」

ダニエーレは大仰に礼をした後、席に戻るために私のそばを通り過
ぎる瞬間、私だけに聞こえる声で言った。

「約束通り、舞台を整えたぞモニカ。あとは君次第だ」

そうして裁判はお開きになり、1日後に青龍連合が同意して決闘裁
判が成立した。

訓練 剣術とは学問である

「驚いたわ、まさかヒースクリフを味方につけていたなんて」

ここは血盟騎士団の本部にある一室。ギルドの一員が宿舎として使うためのものだが、空き部屋を拝借させていただく運びになった。名誉回復が成っていない私へのヒースクリフの援助の一つだった。

「いや、単に団長はフェアを求めただけだろう。血盟騎士団まで敵に回っては、あの会議場はただの魔女裁判の場と化すだけだ」

答える彼の名はダニエーレ。数日前の裁判で青龍連合と解放軍の両方を言いくるめてみせ、決闘を実現させたペテン師と同一人物である。

「それにしても見事な弁舌だったわね。剣術指南役は会話術も指南しているのかしら？」

「集団の長とは常々政治的な要素が絡んでくるのでね。あの程度できなければギルドの幹部など務まらないよ」

ダニエーレの雰囲気はあの裁判での好々爺の雰囲気ではなく、鋼鉄を思わせるそれへ変貌していた。こちらが本性なのだろう。

——ああいった場で雰囲気わざわざ変えるのは、あの場にヒースクリフという鋼鉄の男が居るからかしら？ 立場によって役割を変えられるとしたらとんだ役者ね。

「さて、決闘を実現させた以上、必ずアキラを殺してもらおうぞ」

ダニエーレは狼を思わせる琥珀色こはくの瞳で私を見る。アイテムで着色されたわけではないと分かる自然な色合い。彼もまた私と同じく日本人ではないようだった。

「無論よ。契約なんてなくても奴を生かしたままにしておく理由なんて無いわ」

解放軍や青龍連合からのリンチを防ぎ牢屋から出す代わりに、決闘裁判にてアキラを殺害して欲しいというのがダニエーレとの契約だった。アキラに勝利するために、血盟騎士団剣術指南役の自分が全力でサポートに当たるとも言っていた。

「そうか、心強い限りだ。早速練習に取り掛かろう」

そうして私たちは練習場に移動した。

†

私はようやく手もとに戻ってきた自分の剣をストレージから取り出す。

「バックソードか、良い選択だ」

ダニエーレは私の剣を見て言う。刃渡りは90cmほど、全長は100cmほどの片手剣としては一般的な長さの剣身を持つ剣である。湾曲のない剣身で、突きに対応するために鋒きつばから四分の一のみ両刃になつているため背のある剣の意でバックソードと呼ばれていた。最も特徴的なのは装飾の施された使用者の手を覆うバスケットヒルトと呼ばれる籠状の柄であり、相手の剣から手を守る効果があった。

「まずは構えてみる、そこから修正していく」

私はいつもの構えをとった。右手に剣を持ち頭上から切つ先を左膝に向ける、対人戦や武器を持った等身大のmob相手に取る構えだった。

この構えをとると、ダニエーレはやや驚いた表情をした。

「驚いたな。剣術を学んだことがあるのか？」

「無いけど、どうかしたの？」

妙な問いだった。私は剣術に関してはSAOに入るまで剣に触れた事はなかったはずだ。それを武術に通じたダニエーレが見間違えるのは世辞だとしても奇妙だろう。

「いや、単純にその独特な構えをした事に驚いたんだ。その構えはガードントと言うバックソードの構えの一種だからな。普通片手剣はフェンシングみたいに相手に突き出して構えることが多いから、素人にしては妙だなと思ってな」

納得した。要は素人が偶然剣にあった構えをとったから驚いたというだけだ。たしかに素人と言われた人が構えを知っていたら経験者と疑うだろう。

「さて、得意武器がバックソードというならまずはそれをマスターしてもらおう」

そう言うとダニエーレは自分のストレージから、私のものよりもや

や大振りなバックソードを取り出した。

「異種武器戦闘は応用編だからな。まずは同じ武器同士で基礎を身につけるぞ」

そう言っただニエーレは持ち手を膝まで下げ、鋒を顎まで上げた構えをとる。

「いつでもいいぞ、かかってこい。一撃当てられたら飯を奢ってやる」
そう言っただニエーレは挑発的にやりと笑う。

——へえ、素人の攻撃は当たらないと。やってやろうじやない。
こつちだつてフロア攻略に何度か参加した身よ。舐めた事を後悔させてやるわ。

私は様子見も兼ねてガラ空きになっている頭上へ斬りかかった。
突きは十分に躲^{かわ}せる距離だし、初手を握る有利は確保すべきという考えからだつた。

しかし、私の考えは甘いと言わざるを得なかつた。

ハンドガードで守られているはずの右手に痺れを伴った衝撃が走つた。デュエルをしているのではないのでHPが減ることはないが、それでも刺された嫌な感触は抜けなかつた。

「甘いな、鉄の棒でできたバスケットヒルトは突きなら通るぞ」

そう言っただニエーレは剣を引き抜く。よく見ればダニエーレのバスケットヒルトは板金で構成されていた。

「どうした、来ないのか？」

またにやりと笑い私を挑発する。しかしムキになってはいけない。こういう時こそ冷静にいくべきだ。私は動かず、ダニエーレの攻撃を待った。

すると、前触れもなくダニエーレは防御されていない脆弱な右脇腹へと斬撃を放ってきた。

——速い！ 伊達に剣術指南役を名乗ってないわね。

しかし、防御されていない箇所への攻撃は誰でも予想できる。私は頭上に上げた剣を右前方へ突き出すようにして、剣の根元で受けるようにして斬撃を防ぐ。

今、互いの剣は接触した状態である。もちろんこれも狙った事だ。

攻撃を誘い、狙った箇所を攻撃した以上、この後のトドメも用意してある。

「フッー」

私は右手を持ち上げつつ、ダニエーレの剣を鍔で固定して押し込んだ。撫で斬りを防ぐためにダニエーレの剣に左手を添えて、左側に踏み込む。すると、私の剣はダニエーレの太ももをさせる位置になり、ダニエーレの剣は私に致命傷を与えられない上、力の入れづらい下側となった。

——取った！

私は躊躇せずに突きを打ち込んだ。しかし、突きは空を切った。ダニエーレはいつの間にか左足を軸に舞うように移動して、私の右側に立っていた。双方構えが乱れているので、追撃は不可能だった。

双方構え直し、向き合った。

「ずいぶん対人戦慣れしているんだな。技が身についている」

「ずいぶんと褒めるのね。私はアキラに勝てる腕かしら？」

からかうように言う。正直返答はわかりきっていた。

「いや、このままでは負けるな」

——やはりね。

内心独り言として呟く。アキラは青龍連合きつてのPVPの名手として名を馳せている。実際に不意打ちとはいえ対人戦慣れたレッド4人相手に優勢だった私たちを仕留めた男なのだ。このままで勝てるとは思えない。

「ほら、いいぞ。どんな手を使ってもいいからかかって来い」

おしやべりは終わりだとばかりにダニエーレは言う。どんな手でも良いならば、別の武器を使っても良いのだろうか？

私は、ゆっくりと左手を腰の後ろに回し、剣と右足を前に出す。使わない左手はバランスを取る目的が無い時には背後に隠すのは、ターゲットポイントを減らすという意味だったが、私の場合そうではなかった。

私は後ろ腰に隠した棒手裏剣を二本引き抜く。そして、手で包む様にして持つ。

そして、一気に二本とも棒手裏剣を投げた。狙うは胴体、避ける事が最も困難な箇所である。間髪入れずに大きく踏み込んで突きを放つ。手裏剣に対処すれば突きを防ぎ損じてしまい、突きに対処すれば手裏剣が刺さる、私の得意とする戦法であり、必殺とまではいかないまでも信用する手の一つだった。

だが、ダニエーレの対処は完璧だった。拡散するように飛ぶ手裏剣の片方を左肘で、もう片方を左の手の甲で防いだ。最小限の犠牲、いや防具をつけていたら手傷すら負わないであろう防ぎ方で。姿勢は全く乱れてはいなかった。

私の脳が危険信号を発する。これはまずい。自分は全力の突きを放ち、もう止まらない。鋒は未だ相手には届かず、相手はカウンターを放てる余裕を持っている。

——流石は剣術指南役を名乗ってるだけあるわね。

私は脳内でそう称賛しながら、喉を容赦なく貫かれた。

食事 食事、そして出会い

私たちはその後、25層にあるレストランへ向かう事になった。

「別に本当に奢らなくてもいいのに、直撃じゃかったんだから」

そう。ダニエーレは先ほどの訓練での発言を遂行し、私の食事を奢ろうとしているのだった。

「棒手裏剣が当たっただろう。あれは見事な技だった。一切ソードスキルを使わずにあそこまでやれたら大したものだ」

そう言っつて何やら満足そうにうなづく。私はその様子を怪訝な顔で眺めていると、食事が運ばれてきた。

「そら、食事だ。とつとと食べてしまおう」

運ばれてきたのはナポリタン風の Pasta だった。アインクラッドの料理はリアルに似た物もあるが、微妙に味が違う。

「食前の祈りがまだよ。少し待ちなさい」

私は目を瞑り、食前の祈りの言葉を呟く。

「Benedici, Signore, noi equesti
tuoi doni, che stiamoper
ricevere dalla tua generosità. Per
Cristo nostro Signore。」

それを見て、ダニエーレは複雑そうな顔をする。

「この世界の食事なんて電子記号に過ぎんだろうに。イタリア人は敬虔の度が過ぎるな」

私はダニエーレがどこの出身なのかは知らない。名前からしてスペイン系かもしれないが、そもそもアバターネームを本名にするのは私ぐらいだろう。そう考えると、彼の出身はわかりづらい様に思えた。

「仮想の存在だからといって無碍にするのは良く無いわ。私たちは今はこの世界で生活し、この世界に生きているんだもの。ならばこの世界を現実として扱うか、少なくともそう志向するのだから生きていくという実感も失いかねないわ」

これは私と、今は亡き親友のノンナの信条だった。少なくとも数年

は閉じ込められるであろう世界を、仮想世界と扱い続けるのは虚し過ぎるだろう。

「まあ、そういう考えもあるな。それじゃあ今度こそ食うぞ」

そういつてダニエーレはナポリタン風パスタを食べ始める。その動作には品があり、彼が上等な環境で育ったことを表していた。

食事の相手を見続けるのは失礼にあたるので、私も大人しく食事を開始した。だがしかし、それにしても――

「ナポリタンって、なんでナポリなのかしら？ ナポリ要素全然ないじゃない」

私が日本に来てからの感じたことの一つだった。故郷の都市の名を冠しているスパゲティーだ。奇妙に感じないはずはない。

「ナポリにはトマトソースのパスタがあるそうじゃないか。それが元なんじゃないか？」

――意外とナポリの事知ってるのね。イタリアに來た事あるのかしら？

だがしかし、これも故国の料理問題の一つ。ここははっきりと断言せねばなるまい。

「あるにはあるけど、ケチャップを味の主役にしたりしないわよ。似たのがあるのは否定しないけど、ケチャップ炒めスパゲティーなんていう珍妙な物は断じてナポリ料理じゃない」

そうだ。ナポリにケチャップ炒めスパゲティーなんて物はない。断じて。おばあちゃんも作っていなかった。

「やるならせめて海産物を絡めてほしいわ。海一切関係ないじゃないこのスパゲティー」

ナポリは典型的な港湾都市だ。海産物もよく取れる。だから海産物を絡めるべきだ。たぶん。

「やけに熱心だな。君はナポリ人なのか？」

ダニエーレが呆れた様に言う。確かに今の流れならそう取られるかもしれない。

「違うわよ。具体的には言えないけど私は北部人よ。知り合いにナポリ人が居るだけ」

正確には知り合いではなく、私の母方の祖母がナポリ出身だった。私自身はミラノ出身だが、祖母の料理の味は今もよく覚えている。「すると、君の金髪は地毛なのか？ 正直、あまりラテン系の血筋には見えない顔立ちをしているが、北部人ならまあよくある話だ」

ダニエーレは髪の毛と同じく真っ白な無精髭をさすりながら言う。確かに、成人しても頭髪が金髪のままなのはイタリアどころかヨーロッパでもかなり珍しい部類だろう。

「当たり前じゃない。先祖から受け継いだ色を隠す理由がないわ。染める染めないは個人の自由だけど、みんな自分の色を誇ればいいのに」

このインクラッドでは、意外と髪の毛や目の色を変更する人物が多い。私の様に金髪碧眼に変更する人や、現実ではありえない青髪やピンクに染める人もいる。いわゆるお洒落の一種なのだろうが、わたしには良くわからなかった。

「それだけ綺麗な見目をしていれば迷う必要なんか無かろうさ」「へ？」

ダニエーレがいきなり浮ついた事を言い出すのでびっくりしてしまう。からかっているのだろうか。正直この手の褒め言葉は物心がついた時から言われていたが、彼のキャラクターに合わない言葉である様に感じた。

「驚いたわ。貴方、ちゃんとお世辞も言えるのね」

「まさか、世辞など言うものか。本当に綺麗だと思うぞ」

淡々としていてどこかからかうような口調。まるで私を子供扱いしているようだった。たしかに私とダニエーレでは最低でも親子ほど歳が離れているように見える。だが子供扱いされるのは気に食わなかった。

「からかっているの？ 私、からかわれるのは嫌いよ」

それを聞くと、ダニエーレは心底おかしそうに笑った。

「見ればわかるよ、お嬢さん。さて、飯も食い終わったし出るとしよう」

そう言って、ダニエーレは話は終わりだとばかりに立ち上がる。

「なによ、子供扱いして」

私は小さく呟いた。

†

「この後どうするの？」

まだ時刻は昼間だ。やれる事は色々あるだろう。

「剣を作りに行く。フェアモードとは言え、装備の形状はそのままだ。どうせ性能が制限されるなら、デザインだけでも使いやすい物にするべきだ」

それは一理ある。今回の決闘裁判で行われるフェアモードとは、両者のステータスを同じにし、武器の性能も一定の数値に固定されるルールだ。だが、武器の持ち込み自体は可能なので、好みのデザインの武器を使うことができる。

「それで、君の戦闘スタイルについてなんだが、聞きたいことがある」
やけに深刻そうな雰囲気だ。ダニエーレは言う。何事だろうか？

「君はソードスキルが使えないのか？」

疑問と心配の混ざった口調だった。ダニエーレの心配はもつともだ。先ほどの訓練で、私は一度たりともソードスキルを使わなかった。そもそも、手裏剣を投擲した後に片手剣の単発突きスキルである《ヴォーパルストライク》を使用していれば、せめて相打ちに持ち込めたかもしれない。なのに、私はソードスキルを使わなかったのだ。不思議に思っただけだろうか。

別にダニエーレが憂慮するような、使うのがやたらと下手くそだったり、ソードスキルの発動に関する障害があるわけではない。すごく単純でくだらない、意地にも似た理由だった。

「嫌いなよ、ソードスキル」

「嫌い？」

ダニエーレが不可解そうに言う。

——まあ当然よね。ソードスキルを使えば有利なのは当たり前だし、この世界の戦闘はソードスキルの使用を前提に設定されているのだもの。

だがしかし、私はソードスキルが嫌いだった。

「だって考えてもみなさいよダニエーレ。これだけ現実に近くて、五感を通して物事を感じられる、ほぼ現実と言って差し支えないこの世界よ。その中であれも現実的でない、あからさまにシステムの匂いを漂わせる行動をされると、どうしても現実感を削がれて嫌な気分になるのよ」

これは正直、認識の問題だと思う。この世界はゲームである以上、システムウインドウであったり、ソードスキルであったり。いくらリアルを突き詰めたからとは言え、シミュレーターではない以上どうしてもゲーム要素は出てくるだろう。それは当たり前だし、仕方ないことだ。だが、この世界を現実として生きようとする私には、ひどく煩わしい物のように思えた。

ダニエーレはひどく困惑した様子で眉間に手を当てる。

「つまり君は、フルダイブ環境には問題がないながらも、嫌いだからという理由だけでソードスキルを使わないのか？」

「そうよ。まあ別に一切使わないわけじゃないわ。ストレージだって使うし、危なくなったらソードスキルだって使う。それでも、システム音やアシストが好きになれないのよ」

「なんともはや」

ダニエーレの困惑は呆れへと変わったようで、大きなため息をつく。

「アキラは好き嫌いをして勝てる相手じゃない。君だってそれは重々承知の上だろ？」

「そのくらい分かっているわ。この一ヶ月で貴方からソードスキルを織り込んだ剣術を学ぶつもりだもの。今日はただ単に、普段の私の戦い方を見せただけよ」

わかっている。このような状況になってはこのような情緒的なこだわりなど無用の長物だろう。少なくとも、アキラを討ち果たすまでは。

「ならいい」

その後は会話も無しに黙々と歩く。しばらくして、一軒の質素な鍛冶場付きの武具店らしき場所に到着する。

「着いたぞ。ここだ」

ダニエーレは扉をノックして言う。

「リズベット、ダニエーレだ。開けてくれ」

すると中からは明るい少女の声が返ってくる。

「そこ、空いてますから入っちゃってください」

——驚いた。まさか女性の鍛冶屋だなんて。

男女比の大きく偏ったSAOで同性と出会える経験というのは貴重だった。まして腕のいい鍛冶屋となると、その数はさらに絞られるどころかほぼいないに等しいだろう。

ダニエーレが言葉に従い、店内に入り、私もそれに続く。それと同時にバタバタと足音が店の奥から響いてきて、店の主が現れた。

やや茶色がかった髪とそばかすが特徴的な少女が現れ、明るい口調で言った。

「では改めまして。リズベット武具店へようこそ！」

これがなんだかんだ長い付き合いとなるリズベットとの出会いであつた。

鍛冶 戦支度は最上に

リズベットは快活な雰囲気を崩さず、言葉を続けた。

「貴女がダニエーレさんの言つてたモニカさんですね。私の事は気軽にリズって呼んでください」

リズベット、もといリズはそう言つて右手を差し出す。日本人はあまり握手をしたがらないというのは知っている。もしかしたらこちらに合わせてくれたのかもしれない。

「ええ、そう呼ばせてもらうわね。リズ」

そうしてリズの右手を握る。身長差の分だけあつて小さな手に感じたが、力強く握り返してくる感触は彼女の人柄を連想させた。

私たちの握手が終わつた頃を見計らつて、ダニエーレは言う。

「リズベット。今回設計してもらつた剣と防具についての製図がまだだな。製図台を借りてもいいか？」

「あ、はい。もちろん大丈夫ですよ」

リズは背筋をピンとさせて答える。その姿はダニエーレに怯えているというより、頭の上がない人物に対しての態度に思えた。

ダニエーレが製図台を使うために店の奥に行つたのを見計らつて、リズベットに話しかける。

「ねえリズ。ダニエーレとはどういった関係なの？」

なるべく優しそうに、フレンドリーに話しかけることを意識する。

私は身長も相まって冷たい印象を与えがちとノンナにも指摘されていた。これから世話になる鍛冶師に嫌われる事は避けたかった。

「あー、えつとですね。スポンサーと言いますか、ほぼパトロンと言いますか。正直頭の上がない額を支援して貰っている関係ですね」

——なるほどね。優秀な鍛冶師を困い込むために経済支援をして恩を売ると。しかもリズの態度を見るに、血盟騎士団としてではなく私費での援助をしているっぽいわね。正直どこまで抜け目のない男なのかしら？

「それより、モニカさんとダニエーレさんの関係つてどういう事なんですか？ その、今から発注する剣つてそういう事ですよね」

リズはやはり決闘裁判の件も知っているようだった。それも当然だろう。大事なパトロンが関わっている事件なんて彼女にとっては、今後の生活に関わりかねない出来事だ。むしろ知らない方がおかしいと言えるだろう。

「もちろん——」

協力者、と言いいかけたが、思えばダニエーレとの契約はあまり明るいものではなかった。ダニエーレからアキラを殺せと持ちかけてきたとはいえ、この少女にその事を暴露するのは酷だ。なので穏便に済ませることにした。

「私の指導役よ。剣術指南役をしている彼が適任だっただけ。貴女に人を殺すための剣を作らせるのは酷い事だとは思うけど。仕事だと思つて諦めてちょうだい」

「はい」

リズの顔が曇る。ダニエーレが人死に出る出来事に関わっていることが嫌なのか、それとも殺人剣を製作することが嫌なのか。どちらかは測りかねるが、せいぜい15歳くらいの少女にそれを背負わせると言うのも確かに酷いことだ。

「そう落ち込まなくてもいいわ。仕事だもの、嫌だったら断ればいいわ。ダニエーレに頭が上がらないなら、私がこの鍛冶屋が気に入らないうって事にしてこの仕事を無しにするから。いつでも言つてちょうだい」

するとリズは驚いた顔をする。私が気遣うような発言をするのがそんなに意外だったのだろうか？ まあ人情のかけらも無い人間に見られがちなのは今に始まった事ではないが。

「い、いえ。仕事が不満だった訳じゃないんです。ただ、最近ダニエーレさんの元気が無くて、その矢先にこの出来事だったので、もしかしたらモニカさん関連なのかな？　と思ひまして」

ダニエーレの元気がない。そう言われても彼と面識を持つてから2週間も経っていない。だが、元気がないと言うのは気になった。

その時、店の奥からダニエーレが出てくる。

「終わったぞ。剣と防具について説明するから、二人とも来てくれ」

リズベットにとってモニカの第一印象は冷酷な美人であった。身長は少なくとも170cmを超えており、容姿端麗ながら無表情の威圧感が凄い。美術品の彫刻のような印象を受ける人だった。

ダニエーレが凶面を前に説明を始めた今も、腕を組んだ姿勢で無表情を貫いていた。

「まず剣についてだが、モニカの戦闘スタイルに合わせた物にしたい。剣身は全体的にやや細身で、背の部分の刃を延長しよう。バスケツトヒルトは金属板で構成し、取り回しを考えて重心を手元にする。今のところでの反論は？」

するとモニカは眉間にシワを寄せた。一般的に見れば怒っていると思われるかもしれない、そんな表情。

「私は剣身を細くするのは反対よ。相手が同じ軽量剣ならいいけれど、相手は両手剣の名手として名高いアキラじゃない。途中で武器が破壊されて死ぬのはごめんだわ」

綺麗で好き通っているが、どこか高圧的で冷たく、高飛車な印象を与える。リズはモニカの声をそう感じ取っていた。

——仲、悪いのかな？ モニカさん、プライドが高そうだから馬が合わないとかそういうのかも。

リズは内心、そう思う。しかし、リズの内心をよそに議論は続いていく。

「その事に関しては、剣身の根元を幅広にする事で解決する。君の技量なら問題はないだろう」

「それだと手元重心になりすぎて防御の仕方が限られるわ。背の刃を延長した以上、受け損ねた場合や相手の力が強かった場合に自傷する可能性がある。賛成できないわ」

「自傷の問題に関しては、今後の訓練と防具で防げる。投擲と刺突を中心として戦う以上、この剣の形が最適だ」

ダニエーレは断言する口調で言う。双方の語気は強く、リズの心労を加速させた。

「わかったわ。今のプランで行きましょう」

モニカのその言葉に、リズはほっと胸を撫で下ろす。大人2人が強い語調で言い合っている場合は、やっと16歳になったばかりのリズには刺激が強かった。

「リズベット。君は何か反論はあるか？」

リズは急に会話の矛先を向けられ、戸惑う。

「は、はい。問題なく作成できます」

「そうか。次は防具についての解説だが」

そう言っただニエーレは別の凶面を広げる。そこには綺麗なドレスが描かれていた。

「防具についてだが、このドレスを中心に作っていききたいと思う」

瞬間、リズは部屋の温度が数度下がったように感じた。無論、その空気の発生源はモニカである。

モニカは語調は一切変わらないまま、冷たい怒りを滲ませる声で言う。

「ダニエーレ、貴方。相手が笑えない冗談はただの奇行よ。それがわからない訳ではないわよね」

リズとしては今すぐこの場所を立ち去りたい気分だった。

———というかアタシここに居る意味ある？ ストレスで吐きそうなんだけど。

リズが必死にストレスに耐える中、ダニエーレは理由を説明する。「何も遊びでこのような格好を提案した訳ではない。ちゃんと理由があるとも」

「へえ、じゃあ説明してもらえるかしら？」

未だ解けやらぬ氷の怒りを滲ませつつ、モニカは言う。

「まずドレスである理由だが、スカートをつけるための方便に過ぎない。スカートがあっても不自然でない格好かつ、君が着けていても不思議でない格好を選んだ結果だ」

鈴の音のような音。システムウィンドウを開いた音だ。音の主はダニエーレで、彼は自分のストレージから全長がリズの身長に届きそうなほど長い細身の両手剣を取り出した。

「まずスカートが必要な理由だが、それはアキラの剣術にある」

そう言つてダニエーレが両手剣を構えた所でリズは慌てて止めにかかった。

「待つてくださいい！ この店の中でそんな長い剣振り回したら物が壊れます！」

「ああ、すまん。物に当てるへまはする気はなかったが、配慮がた然なかつた。じゃあ2人とも、窓から見るように」

そう言つてダニエーレは両手剣を肩に担ぎ、外に出た。外に出たダニエーレは剣を構えた。

右足を前に出し、体を鋒と同じ方向に向ける。右手は腰の位置に当て、鋒は顔のたかになるように構えている。短槍を連想させる構えだった。

「あれ見たことがあるわ。両手剣の防御の構えの一つよ」

「そうなんですか？」

「ええ、正面からの攻撃に備える構えよ。手の操作一つで腰から上半身をカバーできる構えだから、似たような構えをとる人が多いのよ」

そんな会話をしていると、ダニエーレが動き始めた。何かの攻撃を弾くように右から左に剣を払う動作をする。そしてその勢いを殺さぬまま、剣と共に体を回転させつつ、ワルツのステップのように飛びかかる。

そして放たれたのは、ここまで風切り音が聞こえてきそうな程強い一撃。しかし、それで終わりではなかつた。今の攻撃の勢いを殺さぬまま、今度は剣のみを腕で回転させながら、低い位置を切り裂く。

その二撃は数秒の間に行われており、両手剣が遅いという印象を与えない速さを持つ技だった。

「すごい。ソードスキルなしでもあんな動きができるんだ」

リズは感心したように呟く。二撃目は下半身を狙う技だったのは彼女も理解し、あるひらめきが浮かんだ。

——下段攻撃にスカート？ ああ、もしかして！

ダニエーレはストレージに両手剣を納め、戻ってきた。

「せっかく広いところだったので攻撃を弾くところから実演して見せたんだが、スカートがなぜ必要か分かってくれたか？」

その言葉に、リズは反射的に答える。

「スカートを防具の偽装に使うんですか？」

リズの言葉にダニエーレは驚いた顔をしたが、すぐに特長的なニヤツとした笑みを浮かべた。

「流石だなリズベツト。やはり君に頼んで正解だった」

ダニエーレは言葉を続ける。

「今の技のように、両手剣は基本的に動きを止めずに回し続ける攻撃が多い。向きは変えられないから上下に打ち分けたり、時折突きを挟む。その過程で、アキラは太腿を狙った攻撃を放つことが多い」

太腿は大きな血管が通る急所であり、それはSAOでも再現されている。下半身は防御が薄くなりやすく、太腿程度の低さであれば、剣を下げた事による上半身の無防備も許容範囲で済むだろう。なににより、脚を傷つければその後の戦闘が大いに有利になる。

「なるほど。下半身をあえて打たせて、こっちは胸なり首なりを狙うって訳ね」

モニカも納得した様子だった。

「それでリズベツト。ドレスを元にした鎧を作成する事はできるか？」

「ドレス系統の鎧はドレスを素材に含めれば可能ですよ。腿^{キユイス}当てはドレスとは別に装備すれば再現可能だと思います」

リズの言葉にダニエーレは安心した様子だった。

「ありがとうリズベツト。後は必要な素材と料金の見積もりを教えてください」

「えっと、片手剣と鎧一式となると――」

リズはメールに文字を打ち込み、ダニエーレに送信する。

「以上になりますね」

するとダニエーレは金貨袋を取り出し、リズに差し出した。

「了解した。とりあえず前金にこれだけ渡しておこう」

リズはそのずっしりとした感触に、喜びと後ろめたさの両方を感じる。普段からかなりの支援を頂いている相手から金を取るのはやや気が引けた。だが仕方ない、これも商売だとリズは気合いを入れる。

「ありがとうございます。では次は素材と料金を持って来てくださいね」

「了解した。素材収集が終了し次第メールで連絡する。ではまた」
そう言ってダニエーレは出口へ向かう。モニカもそれに続くのだからとリズは考えたが、モニカはリズに近づいてきた。

——へ？ アタシなんかしたっけ？ もしかしてお金とつちや不味かった？

リズは内心の怯えを隠し、渾身の営業スマイルをキープする。身長の高い相手の無表情というのはそれだけで威圧的だった。

モニカが口を開き、リズは身構える。

「お店、頑張ってるね。私で良ければまた何か買いに来るわ」

モニカは今までの表情からは想像できないほど優しく笑って、そう言う。その後は振り返らず、店を出て行ってしまった。

「へ?」

かけられた言葉と表情が信じられず、リズはしばしポカンとする。接したのは短い時間だったが、あんな優しい言葉をかけるタイプには見えなかった。

——でも、笑うとすごく優しい顔をするんだ。モニカさん。

「よおし！ 仕事頑張るぞー！」

リズは再び工房に戻り仕事を再開した。

怨敵 戦乙女と世界蛇

リズベツト武具店を出た私たちは、素材収集に出るには遅い時間であると考え、血盟騎士団本部に戻ることにした。

——リズはとても良い子だったわ。あの年で一人で店を切り盛りしていて、なおかつあんなに真面目で礼儀正しいだなんて。今度店に行く時に何か手土産でも持って行ってあげようかしら。

そんな事を考えつつも、ダニエーレに言うべき事を話す。

「ダニエーレ。それで私はいくら渡せばいいの？」

「何をだ？」

ダニエーレはわかっていない様子だった。仕方がないので直接言うことにする。

「私は決闘の装備の何割を払えば良いのかしら？ 7割？ それとも8割？」

血盟騎士団の金銭的支援がある以上、全額支払う事にはならないだろうが、今後の資金繰りのためにも金額は聞いておきたかった。

「いや、前金は全額支払ったが」

「それは知っているわ、あの場で折半したら貴方のメンツが立たないでしょ」

仮にも出資先の前だ、懐具合が寂しいと思わせる行動は避けるべきである。

ダニエーレはその言葉でようやく合点がいったようで、説明を始める。

「まさか君は俺が金銭を請求すると思っているのか？ 安心しろ、君からは1コルたりとも取らんよ」

ダニエーレの言葉は意外だった。私は血盟騎士団にとって部外者である。部外者のためにギルド資金をこれ以上使用するのはいやらしいと思う。

「あの装備結構な額になるでしょ？ わざわざ素材を受注側が持つてくるって事は、素材も一般の物じゃないでしょ。加工費だってバカにならないわ。部外者の私のために、ギルドの資金をそこまで使うの

は、組織として健全とは思えないわ」

まして、血盟騎士団のように少数精鋭方針のギルドとなれば、経済規模から自由に使える資金も限られてくるだろう。貯蓄の少ない新生ギルドであれば尚更だ。

ダニエーレはさして悩むわけでもなく返答する。

「それに関して問題はないぞ。ギルドの資金は使っていない。俺と団長の私費によるものだ」

「はっ？」

思わず声が出てしまう。私費だと？ それこそ部外者に対しての待遇ではない。

「ダニエーレ。私費って貴方、お人好しが過ぎるわ。いくら折半とはいえ、そう簡単に支払える額じゃない。どうせフェアモードよ、鉱石のグレードを下げるべきだわ」

「お人好しだなんて事はない。俺も団長も、君を支援する理由はある。俺は君にアキラを殺してもらわなくてはならない。そのための支援なら、なんらおかしい事はない」

「じゃあなんで良い鉱石で受注したの？ 安物の鉱石にしておけば、発注のみで生産できるじゃない」

今回の決闘裁判で行われるフェアモードでは、装備の性能が低ければ上方修正され、高ければ下方修正されるのだ。わざわざ高い装備を持ち込む必要はない。

ダニエーレは少し悩んだ後に言う。

「フェアモードの性能修正はあくまで数値的な修正に過ぎない。言ってしまうと欠点を含めた状況はそのままとなるわけだ。この修正は結構雑な物だね、安物の鉱石を使用した場合の強度の歪みをそのままに強化してしまう。君も強度が不均一な剣など、まして防具など使いたくは無いだろう？」

「なるほど。たしかに戦闘中に武器が爆散するのは勘弁願いたいわね」

最もな指摘だ。この浮遊城アインクラッドにおける装備の破損と

いうのは、現実よりも悲惨な意味合いを持つ。例えば現実で剣が折れる、曲がるといった事になっても、武器自体は存在している。しかし、この世界では、耐久度が0になった瞬間に、光になって爆散してしまうのだ。折れた剣があるだけ現実の方がマシだろう。防具など、一部の故障ではなく装備そのものが消え去るので被害が大きい。

「それに、剣も鎧も使用者が命を預ける物だ。そこに安物で作ったという妥協が加われば、その装備に対しての信頼感が薄れてしまう。実戦ではそれが生死を分ける事になりかねない」

「そういうものかしら？」

私にはその感覚がわからない。剣も鎧も、結局は道具なのだ。美術品だったり先祖伝来であれば話は変わるかもしれないが、実用なら別だ。職人が全力で制作した以上、無碍むげに扱うのは論外である。しかし、自身の使用する道具の性能を熟知し、性能の範囲内で使用するのも技量の内であると私は考える。

私が理解できていない様子を見て、ダニエーレは肩を竦すくめる。

「君のように鋼鉄の理性を持つている剣士であれば、本能に頼らなければいけない事など確かに無いだろう。まあ、そこはおいおい説明していく」

それきり、私たちは無言のまま歩く。しばらくは無言のままの歩いていたが、私は忘れるはずのないある声を聞き、立ち止まる。

「よお、モニカじゃねえか。奇遇だな」

まるで十年來の親友か何かのように声をかけてきた相手。それは、想像する限り最低の相手だった。

C o s a c i f a i q u i , m a l e d i z i o n e ?

その顔を見た瞬間に、日本語に変換をする事すら忘れた罵声が飛び出そうになる。しかし、私はあくまで冷静に、震える怒りを抑えながら言った。

「あら、決闘相手様がお出ましとは。面白いこともあるわね。もしかして殺されに来てくれたのかしら？」

ダニエーレは私の言葉を待っていたらしく、それに続いて言う。

「よく俺たちがわかったなクソ野郎。理性の欠けた脳でも人間の判別くらいはできたか」

ダニエーレの態度が急変したのがわかる。私からは彼は背になつて見えないが、今すぐ斬りかからんばかりの殺気を感じる。

しかし、ダニエーレほどの大男に凄まれても、アキラは特に同じた様子は見せなかった。

「おいおい、俺は今モニカと話してるんだぜ。少しばかり黙っててくれ」

「ええ、少しだけ話をさせて。言つてやりたいことがあるから」

私とアキラの双方から黙るようになわれ、ダニエーレは怒りを飲み込む。

「それで、言いたいことつてなんだ」

アキラは私にそう言う。譲つてくれるなら言わせてもらおう。

「ええ、貴方を殺す前に聞いておきたかったのよ。貴方が死んだ場合って貴方の所持品は誰のものになるのかしら？」

するとアキラは破顔して言う。

「ハハッ、なるほど。自分が死ぬ気はないって顔だ。やっぱりお前を残して正解だったぜ」

回答になつていない言葉。楽しそうな口調が私の神経を逆撫でする。

「貴方、質問には回答で答えるって習わなかったのかしら？」

「ああ、いや。習つたぜ。そうカツカすんなよ。そうだな、お前が勝つたら全部くれてやってもいいぜ。どうせ俺の死後だしな。まあお前の場合——」

アキラはそこで言葉を区切つて、ストレージから綺麗なロケットを取り出す。

「欲しいのはコレだろ？ 正直に言えよ。恋人とのお揃いだったんだろ？」

アキラはニタニタと、性根の窺い知れる下衆な笑みを浮かべる。

「恋人？ まったく品性のない輩はすぐに色恋に結びつけようとする。単に私がノンナに揃いで送っただけよ。決闘の時はその下劣な

脳味噌を掻き出して軽くしておくことね。役に立たない荷重だわ」

本当は睡でも吐きかけてやりたいが、私は下品な存在になるつもりはなかった。

もう用件は済んだ。別れも言わず、無言で立ち去ろうとする私を、アキラが呼び止めた。

「おいおい待てよ。自分だけ質問して立ち去るってそりやないぜ。俺の質問にもちゃんと答えろよ」

「何よ」

怒りを抑えるのもそろそろ限界が近づいていた。今すぐにもこいつを斬り殺してやりたいが、ここは圏内。斬ってもHPは1ミリたりとも減りはしない。

アキラは私の背中に、疑問半分、興味半分の声をかける。

「なあ、人殺しって嫌なものか？」

意味不明なセリフだった。だが、私には皮肉な事に意味がわかってしまった。

「嫌なことよ。ええ、嫌いなこと。これで十分？」

「ハハッ！」

アキラは楽しそうに独特な笑い声を上げる。

「やっぱりな、大当たりだよ。お前は犬だったか」

やはり、普通は意味不明なセリフを言う。心底嬉しそうに、楽しそうに。

「それじゃ、邪魔したな。会えて嬉しかったぜ」

アキラは背を向け、転移門のある方角へ歩き出す。

「おい待て！」

ダニエーレは叫ぶが、まるで聞こえていないと言った風で無関心に歩き去っていった。

怒りを滲ませるダニエーレに対し、私は言う。

「あれに何を言っても無駄よ。それより剣術の訓練をしたいわ」

「だが——」

ダニエーレは怒りを滲ませる。きっと彼もアキラに何かしら酷い目に遭わされたのだろう。だから、私は言う。

「大丈夫よダニエーレ、私は奴を殺すわ。必ず、刺し違えても。神に誓っても良いわ」

ダニエーレは沈黙する。

「さあ行きましょう。時間がもつたいないわ」

私は血盟騎士団本部へと歩き始めた。

邂逅① 全ては必然の上

翌朝、朝食を済ませた私たちは再び剣術の練習をする事になった。以前の練習と同じく、バックソードと軽装での練習となった。

しかし、今回は座学からという事で、ダニエーレは黒板の前に立っている。

「さて、今日の訓練だが。時間の概念と強弱の概念について説明しようと思う」

「時間？ 強弱？」

本当に剣術の概念なのか疑いたくなるような単語。どちらかと言えば音楽用語と言った方が信じられそう。

私の疑問の言葉に、ダニエーレは答えた。

「まず時間についてだが、これは武術の中心を成す概念だ。四つに別かれていて、手の時間、体の時間、足の時間、歩の時間に別れている」
ダニエーレはそれらを黒板に書いていく。

「これらの時間について名前を、その箇所を動かす事にかかる時間を指している。手を動かすのが手の時間。胴体を動かすのが体の時間。一歩進むのが足の時間。複数回歩くのに必要な時間が歩の時間だ。ここまではわかるか？」

私は肯く。ダニエーレは解説を続けた。

「かかる時間は、手・体・足・歩の時間の順に遅くなる。つまり、動かないで攻撃するのが一番速いという事だ。昨日の訓練も、まさにその実例だったろう」

「昨日って、私が棒手裏剣を投げてやられた時のこと？」

そう言うとダニエーレは肯き、剣を構えた。

「あの時君は、踏み込んで突きを放っただろう。あれは、手・体・足の時間を使用した攻撃だ。攻撃完了にかかる時間は一番遅い足の時間が完了する時間になる」

ダニエーレは私が昨日行ったように、大きく一歩踏み込んで突きを放つ。確かに、言われてみれば踏み込み攻撃は体が移動しないと命中しないので、いくら手の行動が早く終わっても、結局踏み込みが終わ

るまで攻撃は当たらない。派手に動いているから素早く見えるが、実際にかかっている時間は長かった。

「それに対して私があの時行っていたのは突きのみ。手の時間のみだ。実際、あの時の行動の開始は私の方が遅かった。だが先に命中したのは私の方だろう」

「なるほどね」

——さすが剣術指南役。こうして学問的に教えてくれるのはありがたいわね。

だが、そう思うと同時に、自分の不勉強に苛立ちが行く。私がつと真面目に対人剣術について模索していたら、感覚的な事ばかり重視する相手に出会わず、こうして理屈を学べたのではないか？ そうすればアキラに屈する事なく、ノンナは生きていたのではないか？ そういう疑念が絶えず頭に上った。

私の雰囲気を感じたのか、ダニエーレは気遣うように言う。

「正直、君は優秀な方だと思うぞ。最後の一撃の瞬間の反応を見るに、体感的に時間の概念を理解していたようだし、強弱の概念も使いこなして見せた」

「使いこなしたってどういう事？」

「俺が君のバスケットヒルトの隙間を狙った攻撃をした後、俺から君の右脇腹に攻撃しただろ。その時君は、鏢元で攻撃を受け、なおかつ攻撃線から逃れて見せた

まだ慰めているのだろうか？ あれはただ単に攻撃される場所に、防ぐ時に一番力が入りやすい場所を重ねただけだ。防御に関しては誰だってやる事だろう。

「別に、普通の事じゃない？ 鏢元に力が入りやすくて、鋒に力が入りにくいのは当たり前よ。初歩的なテコの原理だし、だれだって経験的に知っているわ」

ダニエーレはかぶりを振る。

「違う。俺が褒めたのは君が今説明してみせた強弱の概念。つまり鏢元は力が入りやすいが移動量は少ない防御向きの部位であり、鋒側は力が入りにくいが移動量は大きく攻撃向きの部位である。その概念

を理解した上で、攻撃線を理解し防御した事なんだ」

「攻撃線？」

今までの言葉よりも軍事的な色合いを感じる言葉だった。どことなく部隊指揮の戦術的用語のように感じたが、実態は違うようだった。

「攻撃線は自身と敵を最短距離で結んだ線で、これは武器が通った場合真先に命中する線だ。これを辿れば最速の一撃が放てる」

そうしてダニエーレはガードントの構えをとる。

「この構えは攻撃線を遮断する事に長けている。見ての通り、この構えは正面の防御に強く、攻撃線を通る刺突、斬撃を防ぐ効果を持つ」

確かに、正面からの攻撃には強い構えである。だから私は対人や人型Mobとの戦闘に使用していたのだが、あくまで経験則から何となくそう思っていただけであった。しかし、こうも論理的な言葉で説明されると、自分の構えの効果を再認識するしかない。

「なので俺はそれを避けるために、君の右脇腹を狙った」

ダニエーレは昨日の斬撃をトレースする様に、左から右へ剣を振るった。

「当然それを読んでいた君は、斬撃に合わせて防御するのではなく、斬撃が来る位置に剣の鰐元を置き、カウンターへの予備動作とした。その上で、君は俺との直線上から外れるために左へ一歩進んだだろう」

「ええ」

確かにそうした。もしあの状態で破れかぶれに剣を動かされたら、勝利は確実になるが、私の足も傷つく事になる。それを避けるための移動だった。

「自信は攻撃線から逃れ、相手に確実に攻撃を当てられる姿勢を取る。それが攻撃線を理解していた証拠だ。おかげであのカウンターは完成された、私は逃げるしかなかった」

ダニエーレは言葉を区切り、手を叩いた。

「さて、講義はここまでにして実戦訓練といこう」

「わかったわ」

おそらく、今後もうこうして座学と実技を交えて教えるつもりなのだ

ろう。きちんと概念を説明し、実技でそれを証明する。なんだかんだ、私は優良な師と出会えたようであった。

†

昨日は一日を訓練に費やしてしまったので、今日は採掘を行うとの事だった。なので、私たちは42層の《夜空の洞窟》へと来ていた。「足元、気をつけるよ」

ダニエーレが先頭になり、ランタンを持って進んでいる。彼が現在握っている武器はロングソードで、それを片手剣として扱っている。

——それにしても薄気味悪い所。

不快なジメジメとした感覚と、なにやら小さな生き物が動き回るような音。暗がりで見界と来れば、誰だつてこの場所が嫌になるだろう。少なくとも、私はここで夜を越したいとは思えない。

コツン、コツンと足音だけが響く。そんな状況が嫌になり、私は言う。

「ねえ、ダニエーレ。ここつて虫とか出たりしないわよね。私大きな虫が嫌いなものよ。小さな虫も好かないけど」

冗談のつもりだった。この洞窟に出るMobはダニエーレから聞いているし、出たとしてもパニックになるほど私がかよい乙女ではなかった。

「出ない——らしいぞ」

曖昧な返答。出発前は散々この洞窟の情報を私に暗記するよう要求したくせに、自分は自信がないようだった。

「ちよつとダニエーレ。今更言つてなかつた情報があるとかやめなさいよ。情報は命に関わるのよ?」

「別に言つてない情報があるわけじゃない。血盟騎士団^{ウチ}では確認していないだけで、そもそも噂程度の、信頼性に乏しい情報だ」

歯切れの悪い口調でダニエーレはそう言う。

——もしかしてジョークとか言おうとしてくれたのかしら? だとしたら申し訳ないわ。

だが、実際はそうでは無かつたようで、ダニエーレは言葉を続けた。「剣術訓練の休憩中、部下から聞いた話だったんだが。その部下のフ

レンドに金メッキ一式の装備を好む輩が居るそうだ。そいつがこの洞窟に来た際、なにやら奇妙な空気の流れを感じたと思うと、突風が吹いて穴に落下したらしい。落ちた先はなんと人間よりデカイ幼虫の群れの中だったらしい。糸を吐きつけられて身ぐるみを剥がされたようだが、無我夢中で逃げ出すうちに何とか帰還できた。と言う話だ」

「なるほど」

まさに噂話。雑談の種といった内容だった。

「まあ信憑性は低いわね。私も聞いたことないし」

私がそう言うと、ダニエーレは心配そうに聞く。

「ところで、本当に虫がダメなのか？ なら本当に幼虫が出る前に、君だけでも引き返すべきじゃないか？」

煽るわけでも、バカにするわけでもない、心配そうな口調。どうやら本気で私の虫嫌いを心配しているようだった。

「別に、大丈夫よ」

そう答えはしたが、実は不安であった。確かにパニックにならない自信はある。きっと冷静にいつも通り戦えるだろう。しかし、あいにく私は記憶力が良い。虫を自分の剣で切り刻んだ映像を食事中に思い出す悲劇は演じたくは無かった。

ダニエーレは急に立ち止まる。

「どうしたの？」

「足元気を付ける。ここから右手に大穴がある」

ダニエーレがランタンをかざして言う。そこには光をすべて飲み込んでしまうような穴があった。

「ここからしばらくはこの大穴が続く。落ちるなよ」

「落ちないわよ」

一応、なるべく左の壁に寄るように注意する。アインクラッドは一応落下ダメージは存在する。しかもかなり大きな。その大きさは、自殺者の死因のトップが落下ダメージが占めることが証明していた。

そうして私たちは、なぜか天井が薄明るい広間に出る。目を凝らしてみると、天井に無数の光が星空のように輝いていた。

「ああ、ここ綺麗だろ。なぜか副団長はこの場所嫌いらしい。俺は好きなんだけどな」

ダニエーレは独り言のように呟く。その言葉より、私はこのシチュエーションが気になっていた。

——薄暗い洞窟。星空の天井。幼虫の大群。まさか！

「これまさか、土ボタルだったりしないわよね？」

「土ボタル？」

ダニエーレは聞き返す。

「天井からぶら下がって発光する虫よ。その風景がこの景色に似てる」

だんだん気味が悪くなってきた。条件が整いすぎている。だがダニエーレは呑気なままだった。

「なるほどな。でも大丈夫じゃないか？ あの光の小ささを見るに、大した大きさはじゃないだろう」

「まあ、それもそうね」

私は一抹の不安を残しながら先に進む。すると、分かれ道に出た。

「左は行き止まりだ。マップにも書いてあるだろ」

「いちいち言わなくてもいいわよ」

マップには分かれ道、と錯覚してしまうほど大きな横穴があると書いてった。横穴の先は縦穴になっており、登ることは不可能だったそうだ。

すると、妙な匂いがした。生臭いような、ドブのような悪臭。

「ねえダニエーレ。何か臭くない？」

「そうか？ まあ洞窟が臭いのは当たり前だろう。先に進もう」

ダニエーレがそう言い、先に進む。私も後に続くこうと一步を踏み出した瞬間、考えた。

——この悪臭、風に乗って漂ってないかしら？

そう、この悪臭は横から。この横穴から風に乗って来ているように感じた。

「ねえ、ダニエーレ——」

私はダニエーレに質問しようとしたが、それは遮られてしまった。

なぜなら、突然横穴から飛び出た何かが、私の体を何かが殴り飛ばしたのだ。

「――！」

言葉も出せず、私は右手にある大穴へと落下する。私を突き飛ばした存在が、突風であった事に気づくのはのちの話であった。

邂逅② 同士だが同志ではない人

「ンヴッー」

長い落下を経て、私は地面に叩きつけられた。衝撃こそ伝わってくるが、被ダメ時の痺れる感覚は存在しなかった。

「一体何なのよこれ」

背中から落ちたので、目を開くと上を見上げる形になる。落ちた時の崖は全く見えず、本当に長い距離を落下したことがわかった。

上体を起こし、あたりを見回す事にする。だがしかし。

「あれ？…なんで？」

上半身が動かない。拘束具で固定されているというより、まるで全身がゴム質の物と一体化してしまったような、弾力のある拘束。

かろうじて動かさせた首を回してみると、左手には異様な光景が映っていた。

「なんなのよ、これ」

そこには先ほど見た洞窟内の星空と同質の光があった。視界が利くほどの、青白い光。だが、そこは問題ではなかった。問題は、光を発する存在が私より遥かに大きい事にあった。

天井から吊り下がった、大きな球体。青白く発行したそれは、まるでシャンデリアのように、広大な地下空間を照らしていた。数えきれぬほど、たくさん量が。

発光していた事もあって、私はすぐにその発光体の正体に気がつく事ができた。

「繭まゆよね、これ」

途端に自分の背中のゴム質のソレがおどましくなる。発光する繭は、糸というより樹脂的な何かで構成されていて、まるで自分を拘束するそれと同質のように思えた。

私は急いでアイテムウィンドウを開き、拘束解除のポーションを使用する。使用した途端、拘束は溶けて消えた。

私は抜剣する。念のためだが中型の円盾をストレージから取り出して構えた。いよいよもって、あの噂の存在が確信に変わったからで

ある。

——あの良くある噂話と全く同じ状況。おあつらえ向きに配置された衝撃吸収場所。そして巨大な繭。ここまで来て何も無いというわけがないわ。

あの繭のサイズを見るに、成虫はとんでもない大きさになるだろう。しかも攻撃パターンも能力も知られていない。だとすると、ダニエーレと逸れてしまったのは痛かった。彼は攻略組として、未知の敵と戦った経験が豊富である。私も多少は攻略組に出入りするが、あくまで下っ端。状況判断能力においてはダニエーレの方が遥かに優れているだろう。そんな彼の助けが無いのは痛かった。

明るいとはいえせいぜい薄明るい程度である。そこまで頼りにならない視界の補助のために、時折立ち止まって聞き耳スキルを発動する。

それを繰り返していると、私の耳がなにかの音をキャッチした。反響を繰り返した音なので、雑音まじりになってしまっただけではいるが、明かに動物が動く音である。

近くにつれ、音は次第に明瞭になる。それはまるで地面に杭を連続で叩きつけるような音。その音を聞き、このフロアにいるMobの形状が大まかに推測できた。

——たぶんここにいるのは幼虫タイプじゃなくってムカデ型ね。クソでかい幼虫つても単にムカデ型の敵を見間違えたんでしよう。この連続で地面を叩く音は幼虫型もクモ型にも出せないでしょうし。なぜ繭を作るのにムカデなのかは知らないが、この音から察するに相当な大型で、噂通りなら複数いるだろう。関わる理由がなかった。私はムカデから距離を取りつつ、出口を探して歩く。しかし、この部屋は長方形になっていて、どんだんムカデたちの足音が大きくなっている。

索敵のために足を止め、聞き耳スキルを使用する。相変わらず信じられないような轟音だが、その中に微妙な音が聞こえた。ジェット戦闘機のエンジン音を思わせる、甲高く力強い効果音。それは私にも聞き覚えがあった。

片手剣スキルの単発技最高峰の威力を持つ、突進突きソードスキル《ヴオーパルストライク》。そのソードスキルの発動音だった。つまり、巨大ムカデと現在進行形で戦っているプレイヤーがいるという事である。

それもそうだ。自分だつてこの場所に來れたのだから、他のプレイヤーが来ていてもおかしくはない。私より先に來ていたつてなんら矛盾は無いのだ。

考えてみれば奇妙な事だ。虫の巣の中心部に來たはずなのに、未だ目撃しているのは繭だけ。居ないということとは、留守にする用事があつたという事に他ならなかつた。

私は走つた。今はそのプレイヤーにムカデはかかりきりだが、倒してしまえば私を殺しにかかるだろう。そうなれば土地勘のない私は出口すら見つけられずに死ぬだろう。幸い現在戦っているプレイヤーは、大勢のムカデ相手に冷静にソードスキルを発動できる腕を持っていてるようだ。きっと私が出口を探す時間くらいは稼いでくれるだろう。

私は死ぬわけには行かない。ノンナの仇を討たなければならないし、ここで死ねばダニエーレとの約束を反故にする事になる。

ああ、だからこそ。

だからこそ。私は音源へ向けて全力で駆けた。

——危ないから？ 今逃げれば助かるから？ だから何。そんなもの、何一つ逃げる理由にはなりはしないわ。今困難と戦う者がいて、自分がそれを助けることができる力を持つのなら、助けない理由はない。それが高貴ノブレス・オブリージユなる者の義務つて物でしょ。

『高貴さとは、行い続ける事である』父が私によく言い聞かせた言葉だ。貴族とは生まれながらにして高貴なのではなく、日々その力を困難に打ち勝つために使用してこそ高貴な存在となるのであると。行い続けてこそその存在なのだ。

既に政治的には意味のない血筋ではあつたが、先祖より継いだ在り方はちゃんと私の心に根付いていた。

私は走り続け、ついに現場に到着した。そこは地獄のような有様だった。10メートルはあろうかという巨大なムカデが6匹も一か所に向けて攻撃していた。

ムカデと言うにはあまりに異質な外見である。ムカデのように硬質な外殻に守られているのではなく、幼虫にそのままムカデの足が生えたような外見だった。口にあたる部分は岩盤掘削機のようになっており、グロテスクな暴力性を強調させていた。

このムカデ、凶体に比べてとんでもなく素早い。口のソレを振動させながら突進するのが主な攻撃方法なようで、回避されたら反転して攻撃を仕掛けるようだった。たちの悪い、反撃のし辛い攻撃である。それを6匹が絶え間なく続けており、中のプレイヤーは絶望的かと思われた。しかし、攻撃と攻撃の合間に、プレイヤーの姿が覗く。

視界が悪く、あまり見えないが小柄な影であった。彼は片手剣一本の装備で、四方八方から迫りくる巨体を回避するのに手一杯なようだった。

助太刀が必要だ。だが無闇に突撃したところで、攻撃パターンを変化させて彼の回避をより困難にするだけだろう。だが、遠距離攻撃はせいぜい私の棒手裏剣くらいで、投剣スキルはそこまでの大ダメージは出すことはできない。

仮に投げたとしても、せいぜいこちらに気を引くのがせいぜいで、私まであの乱闘に巻き込まれてるだけだ。これでは二人とも遅かれ早かれ死ぬだろう。

ならば方法は一つしかない。一番使いたくは無かった奥の手。

—— 本当は決闘裁判まで隠しておきたかったけど、やるしかないわね。

私はシステムウインドウを開き、盾を収納する。そして、ホルスターを出現させた。

銃のそれではない、多数の棒手裏剣を差し込んだ、弾帯を思わせる物である。それを、両腕・腰。太腿の分を装備する。

そして剣を鞘にしまい、両腕のホルスターから三本ずつ抜き取り、両手の指に挟む。

そして両腕をクロスするようにして、ソードスキルを起動する。投剣スキルにはない、異質な構え。幸にして相手の肉質は柔らかかそうであった。

私は加速中のムカデ目掛けて、両手の棒手裏剣を投擲する。右手と左手の標的をそれぞれ別にし、2匹に分けて命中させる。もつと打ち分けることもできたが、3本命中させないと効果が出ない恐れがあった。

命中後、2匹のムカデは急に体の自由が効かなくなったかのように滑り込んで止まる。麻痺効果による物だ。命中させた棒手裏剣は麻痺効果のある物だった。

だが、今の攻撃の特殊性は麻痺効果ではない。スロージンクナイフやピックに毒効果や麻痺効果を付与するのは、専用のアイテムを使えば簡単に行える事だった。

投剣スキルには両手同時に発動するスキルはない。先ほどのように、両手に投擲物を持ち、投擲するスキルは存在していない。なので、今のソードスキルはあつてはならない物である。

———どうか、彼がその事に気づきませんように。

救出相手の彼が私のスキルの異常性を認識しなければいいが。そう願いながら、6匹全てに投擲を命中させる。麻痺効果が発動し、全てのムカデは沈黙した。

普通のモンスターでは、まずこうは行かなかつただろう。普通だつたらまずここまで命中しない。ムカデが通常Mobにしては異様なほど大型で的が大きかつたから当たつたのだ。その上、肉体の装甲値は有つてないような物で、雑な当たり方をした棒手裏剣が弾かれる事がなかった。驚異的な結果のように見えたが、相手が良かっただけである。

「おーい。貴方大丈夫？」

私は抜剣し、突撃を受けていた彼に近づく。ムカデにトドメを刺すのも大切だが、それ以上に救出相手の容体の方が大切だった。

「ちよつとー」

しかし、彼は私の言葉を無視して走り出した。いくら何でも急ぎす

ぎである。まずはHPの回復が先のはずだ。彼は駆けつけざま《ヴオーパルストライク》を叩き込み、続け様に《ホリゾンタルスクエア》を打ち込み、ムカデのヒットポイントを全損させる。

「ちよつと貴方。HPは大丈夫なの？」

私の言葉を無視し、彼は2体目を殺しにかかる。頭上のアイコンはプレイヤーのようだが、その姿は会話への反応が設定されていないNPCのようだった。

私は言葉をかけるのを諦め、ムカデにトドメを刺そうとする。しかし、ふと立ち止まる。聞こえないはずの音が聞こえたためだ。

地面を高速で杭が乱打するような音。それも複数。全てがこちらに向かっていているようだった。

「チツ！　また来たか！」

今までムカデを切り刻んでいた彼が初めて口を開く。彼は手早く2匹目のHPを全損させながら、こちらに叫ぶ。

「おいアンター！　死にたく無かったらついて来い！」

少年らしき声に似合わぬぶつきらぼうな言葉。だが今はそんな事は言ってられない。私は納剣し、彼の後を追う。

背後から迫る乱打音は徐々に大きくなり、否が応でも追いつかれつつある事実を理解する。

すると、先頭を走っていた彼がいきなりスライディングをした。そして膝ほどの高さしかない穴に綺麗に収まる。

「おい！　こっちだー！」

やるしかない。私は走りながら剣を装備欄から外し、やったことも無いスライディングを敢行する。しかし、素人芸はうまく行かないものだ。

「——ツ！」

姿勢を高くしすぎたのか、顎を強打して首だけが外に出る。衝撃で霞む視界に、土煙が舞った。

——土煙って、まさか！

土煙が晴れると、その全容が明らかになる。ブヨブヨとした白いモノ。それがムカデの頭周りであることは瞬時に理解した。そして、す

ぐに自分に攻撃が加わる事も。

ムカデは壁に刺さった口を引き抜くと、下を向いた。私の方向である。口のグロテスクなドリルが、私の頭をかち割るために振動を開始する。

絶体絶命だ。私は腕で体を押し込もうにも、この穴の入り口の壁は存外厚く、私の肩から肘までを完全に押さえていた。足は空を切るばかりで、ひっかけられそうなものは何も無い。

ムカデが頭を引っ込め、反動をつける。まさにギロチンで処刑される罪人だ。しかしギロチンとは違い、頭はミンチだろうが。

そして、ムカデの口が私の頭をミンチにする直前――

「セイアツ！」

穴の内部から気合を入れた声が響き、私が引っ張られる。頭上で轟音が響き、間一髪であった事を悟る。頭がミンチになる事態は避けられたようだ。

そして私を引っ張った主と目が合う。今までは薄明かりの下だったので、お互いの顔がわからなかったが、ここで初めてお互いの正体を知った。

「驚いたわ。まさかこんな所で貴方と会うなんてね、キリトくん」

私と対面したのは、攻略組として常に最前線を進み続けており、なおかつ情報を独占する悪のベータテスターことキリトだった。

私自身、攻略組に参加した事がない訳ではないので、キリトとは面識があった。といっても、ノンナが挨拶まわりを敢行した時に付き添いとしてだったが。

しかし、キリトが発した言葉は穏当な挨拶や救出の礼ではなかった。

「あのソードスキル。一体何だ？ 投剣スキルに両手同時に6本のピックを投擲するスキルは無い。どうやった」

コミュニケーションを意図しない、情報のみを求める言葉。コミュニケーションは苦手そうではあったが、以前会った時もここまでひどく無かった。

「その前に、立つてもいいかしら？ 女性を倒したままにするつもり

？」

キリトは何も言わずに退く。私は立ち上がり、言葉を続けた。

「それに、年上には敬語を使いなさい。前会った時の貴方の方が幾分か紳士的だったわよ」

キリトはせいぜい13。高く見積もって15だろう。声を聞かなければ女子にも見えそうな顔立ちのせいでわからないが、多分間違っ
てはいないはずだ。

「わかりました。それで、あのソードスキルは一体何です？ 教えて
いただけますか？」

敬語にはなつたが、教えるの一点張りだった。無論、タダで教える
つもりはない。

「貴方ね。タダで教えるわけがないでしょ？ 私にメリットが無い
わ。相応の対価を提示して頂戴」

キリトは無表情のまま、予測していたのか、すぐに反応する。

「金でどうです。言い値で出しますよ」

「論外ね。金で売れる情報じゃ無いもの。今貴方に言つて広められた
ら、私は明日には大勢に詰め寄られているわ」

大勢にスキルの取得条件など聞かれるなりするのもやっかいだが、
決闘相手のアキラに知られるのは避けたかった。

その反応を見て、キリトは少し間を置いてから言う。

「同等価値の情報ならどうです？」

「同等価値？」

思わず聞き返してしまった。私のこのスキルと同等な価値を持つ
情報とは一体何のことだろう。

私の食いつきを見て使えたと確信したのか、キリトはさらに札を
切ってくる。

「そのスキル。なんの前触れもなく追加されませんでしたか？ 習得
条件がわかる訳でもなく。ある日突然に、唐突に」

驚きを隠すだけで精一杯だった。なぜこのスキルが突然スキル欄
に追加されていた事を知っているのだろうか。だが、今の言葉で確信
した。

「キリトくん。貴方、私と同じ状況って事かしら？」

キリトはしばし沈黙し、答える。

「少なくとも、同等の情報はお返ししますよ。満足がいかなかったらいくらでも金を支払いましょう」

「明言は避けるって訳ね」

ボカした言い方。彼もまた、何かしら知られたくない事情があるのだろう。まあ、敵の多い彼からしたら当然かもしれないが。

「なるほど。まあ、わかったわ。貴方の情報も気になるし。ただ、こっちからの条件も提示させて頂戴」

キリトはコクリと頷く。

「まず一つ、お互いの情報は絶対に口外しないと誓う事。二つ、互いが納得するまで情報を聞き出して良いとする事。三つ、情報が期待通りではなかったからと言って、自分は情報を言わないとかしない事。以上よ、大丈夫かしら？」

「大丈夫です」

キリトは即答する。所詮は口約束だが、逃げられないこの一対一の状況で、約束を反故にするなんてことは無いだろう。

「わかったわ。私のスキル、あのムカデを麻痺させる時に使ったスキルだけど、名前は——」

瞬間、少し迷う。キリトは約束を破ったからといって失う人間関係は無い。そのうえ、レベルも彼の方が上だ。逃げようと思えば強行突破はたやすいだろう。だがしかし。

——ここで別の条件不明のエクストラスキルの情報を聞き出せば、決闘に役立てられるかもしれない。

その思いに駆り立てられ、私は口にする。

「——手裏剣術。スキル欄にはそう書いてあったわ」

明言した。これで洗いざらい情報を吐く契約に乗ってしまった。もう戻れない。腹の決まった私は、キリトに提案する。

「ここでもいいけど、もう少し奥で話さない？　ここは少し君が悪いし狭いわ」

どうやらここはMobのポップしない地帯のようで、そのうえ奥に

は休憩できそうな部屋があった。

「わかりました」

キリトが了承し、私たちは奥の部屋に向かった。

邂逅③ 過去からの最後通牒

私たちは安全地帯の比較的広い部屋で向かい合って座った。そこには寝袋が既に設置してあり、焚き火もそのままになっていた。

キリトは自分のものであろう寝袋の上に座ると、焚き火を再点火した。

「貴方、もしかしてここで寝泊りしてるの?」

するとキリトは面倒くさそうにして言う。

「そうですよ。それより、早く手裏剣術についての情報を教えてください」

早く教えるの一点張り。私と雑談をする気は無いようだった。仕方なく、私は説明を再開する。

「わかったわよ。手裏剣術の習得条件は不明。貴方が言っていた通りに、ある日突然スキルスロットにあったわ」

「ここまで言った所で、キリトが質問を挟んでくる。」

「習得したのはいつ頃ですか?」

「習得時期、というか存在をはじめて知ったのは、10月の5日。ちょうど今から3週間前ね。答えはこれでいい?」

私の言葉に、キリトは頷く。

「じゃあ話を続けるわよ。このスキルは投剣スキルの発展版。射程、威力、投擲本数などを増やした上位スキルとしての色合いが強いわ。さっき私がやってみせたように、両手を使ったスキルや、左右で連続で投擲するスキルもある。ここまでで質問は?」

今度はこちら側からそう聞くと、キリトは質問する。

「そのホルスターはどうやって装備しているんです? 明らかに装備枠外の場所に付けてますけど」

「これも手裏剣術のスキルよ。装備枠が増えたというより、このホルスター専用の装着箇所が追加されたような感じよ。ホルスター以外は装着できないわ」

「なるほど」

キリトは納得したように頷いて言う。

「現在使用できるソードスキルはどう言った技がありますか？」

「まだ熟練度が高くないから、使えるのは二つだけよ。さつきも使った6本同時投擲スキルの《薄氷》、1本を全力投擲するスキルの《花車》きやしゃの2つだけね」

「じゃあ花車を使ってみてください」

キリトの言葉に、仕方なしに私は立ち上がる。棒手裏剣をホルスターから1本抜き、《花車》の構えを取る。すると私の右手は薄赤色に染まり、ソードスキルが発動する。

構えは至って単純。左手を前に出し、棒手裏剣を持つ右手を耳の後ろまで持つていく全力投球の構え。投擲姿勢自体は投剣スキルの《シングルシュート》と大して変わらないが、こちらの方がより全力で力を込める技だった。そのため、射程と威力はシングルシュートに勝るが、姿勢ゆえに瞬時の発動には向かない技だった。

私はシステムアシストに促され、花車を発動する。投擲された棒手裏剣は、薄赤の軌跡を描きながら壁に突き刺さる。なんの変哲もない、簡単な技だった。

「どう？ そんな面白いスキルじゃないでしょ？ 見ての通り投剣スキルをダメージソースとして運用できる程度の威力にしかたけのスキルよ」

実際にヒースクリフが使用する《神聖剣》に比べればなんの派手さもない。ただの投剣スキルの延長線にあるものだった。

だがキリトはそう感じなかったようで、重苦しい口調で私に言う。「モニカさん、率直に聞きます。貴女はそのスキルを対人戦で使用するつもりですか？」

——驚いた。やっぱ攻略組に居るだけあって洞察力は優れているわね。

私は内心驚く。キリトが約束を反故にした時の対策のため、なるべく手裏剣術は無力なスキルだと思っておいて欲しかったが、そうはいかないようだった。

「ええ、もちろん。必要に差し迫られたら使うに決まっているわ」

キリトが危惧したのは最もだった。手裏剣術は対Mob戦では大

した効果を発揮しないだろう。なにせ沢山投擲できて威力が高い、いわば効率の良いだけの投剣スキルと変わらない。M o b戦で遠距離火力が欲しいなら複数名で同時に投げれば良いし、投槍やチャクラムなど威力のある投擲武器に切り替えれば良い。手裏剣術のメリツトはそこではない。

「手裏剣術の性能、あれは遠距離武器の範疇はんちゆうを超えています。威力は確かに一般のソードスキルと変わらない程度ですし、使い勝手もよろしくないでしょう」

キリトは一旦言葉を切る。彼の声は苦しそうで、何か吐き出すような、震えるような声色だった。

「飛翔速度は群を抜いて速い。おそらくレイピアの一撃に勝るでしょう。そんな攻撃が、通常のソードスキルと同じダメージを遠距離から与えることができる。これらの特性はM o b相手では効果的じゃないですが、対人戦だと必殺技になる。なにせこのゲームでは投擲武器は大したダメージにならないという常識がある。まともに遠距離攻撃に対して対策しようとしたプレイヤーは居ないでしょう。そこに、致命傷を与えられる遠距離攻撃が現れれば——」

「キリト」

私はキリトの名前を呼ぶ。彼はどうやら手裏剣術を過大評価しているようだった。確かに対人戦におけるアドバンテージになるのは認めるが、彼の評価は臆病もいところだった。

「別に手裏剣術は必殺のスキルじゃない。投擲モーションは見え見えだし、盾を持ち出されたら普通に防がれてしまうわ。大体このゲームは接近戦がメインで行われる以上、相手は全力でこちらに接近してくるわ。そんな中投擲できるのはせいぜい一回か二回程度でしょ？ 確かに先手は取れるかもしれないけど、せいぜいそのくらいが限界だわ」

私の言葉に、キリトは苦虫を噛み潰したような顔をする。未だ彼は納得していないようだったが、決闘裁判におけるなけなしの切り札である以上、言いふらされた時に強いスキル扱いされるのは避けたかった。万が一キリトが流した情報がアキラの耳に入り、対策でもされた

ら目も当てられない。

「それで、貴方のスキルは何なの？」

私は話を切り替えるようにして言う。そうしてキリトは二刀流スキルの説明を始めた。

†

「なるほど。両手に武器を装備したDPSの良いスキルね。貴方のスキルの方がよっぽど強そうだね」

キリトの二刀流についてまとめると、両手に武器を装備し、高速で連打を叩き込むスキルであるようだった。対人戦での効果は不明だが、少なくとも対Mob戦でのDPSは突出した物になるだろう。

「それで？ 習得条件はわからないの？」

「わかりませんよ。そちらと同じです」

お互いのスキルの効果や特徴は分かったが、やはり習得条件については不明なようだった。自分のスキルの習得条件が不明である以上、キリトの責任を問うことはできない。

スキル関連で聞くことはもう無くなってしまったので、別の話題を振ることにする。

「ねえキリト。何で貴方はこんな所に居るの？」

純粹な疑問だった。自分がこんな所に落ちてしまったのは、そもそもこの《夜空の洞窟》に鉱石を取りにきたという理由がある。だが、ここは攻略層ではない。攻略組ならば攻略層のダンジョンに潜っているのが道理だろう。

「その事について教えると言った覚えはありませんよ」

キリトは突き放すようにそう言う。まるで最初に戻ったような感じだった。

「別に、言いたくないなら良いわよ。それで？ 転移結晶って使えるかしら？」

「使えませんよ。出口なら後で案内します。それまでは大人しくしててください」

相変わらず無礼な口調だったが、一つ収穫があった。

——なるほど。トラップにかからないと入れない上、転移結晶も

使えないような危険な場所にわざわざ来る用事があるってわけね。

しかし、これは口にしなかった。下手に相手を煽り、不機嫌にしては今後の脱出にかかわるだろう。

「ちよつとパーティーメンバーにメール送るけど良いかしら？」

キリトはうなずく。思えばダニエーレに連絡をまだしていなかった。HPバーが減っていない以上、無事なのはわかっているだろうが、心配をかけてしまっているだろう。

そうして私がダニエーレに連絡を送ると、即座に返信のアイコンが灯った。

「早いわね」

私はそう独り言を言いながら、アイコンをタッチする。しかし、送信主はダニエーレではなかった。

「嘘……でしょ……」

指が震える。ありえない送り主名。送れるはずのない人物からのメールだった。

「どうしました？」

キリトは私の様子が変わったのを見て聞いてくるが、答える余裕はなかった。

送り主はノンナ。送信日を見ると、彼女が殺害される1週間前からに設定されていた。内容はこう綴られていた。

『モニカへ。このメールが届いたと言うことは、私が死亡したか、メールの送信を取り消さなかったということですよ。もし、なんらかの事情で私がメールの取り消しを忘れていた場合、教えてください。メールの添付物が無いと私は困ってしまいます。』

本当に私が死亡していた場合は、添付物を受け取ってください。全て差し上げます。モニカならきつと有効活用してくれると信じています。私の死に責任などを感じたりせず、自分の生きたいように生きてください。ノンナ、もとい楠木陽毬くすのきひまりより』

そして添付物には大量の金、アイテム、装備品などが詰まっていた。事実上のノンナの全財産とも言える量だった。

私は深呼吸し、自分を落ち着かせる。

——落ち着きなさい、モニカ。泣くのは今じゃないでしょ。落ち着いて、今できることをしなさい。

私はそう言い聞かせ、すんでの所で涙を止める。その様子を見て、キリトが話しかけてきた。

「どうしました？ 何かあったんですか？」

私はその言葉に答える。

「殺された友達がね、遺産を私に送るように設定していたのよ。あの子、あんまりこういった手の込んだこと得意じゃなかったでしょうに、粋なことをするものだわ」

「殺された？」

キリトが驚く。本当に何も知らないようだった。もしやと思い、私は聞く。

「ねえキリト。青龍連合のアキラと私が決闘裁判をするのって知ってる？」

「決闘裁判？ なんですかそれ？」

まるで存ぜぬと、キリトは怪訝な顔をする。なるほど。焚き火と言い寝袋と言い。彼はここに長いこと寝泊りしていたせいで、情報に疎いようだった。

「なるほどね。ねえキリト。あのムカデたちっていつになったら居なくなるの？」

「目標を見失ってから全体が搜索モードに移るまで2分。その後一番巢の個体数が減るのが20分後です」

なるほど、どうやら無駄話をする時間はありそうだった。

「いいわ。暇つぶしにもまるでしょうし、聞いて頂戴。私が巻き込まれた事件の経緯を」

そうして、私は事件の経緯を話す。

過去① セピアに褪せた過去

音を途切れさせる事なく鳴る風切り音。一つの風切り音で終了するのではなく、強弱を伴いながら止むことなく鳴るそれは、私にとって毎朝の目覚ましの代わりとなっていた。

私は上体を起こし、短槍を振りまわしている相手に言う。

「今日も朝から精が出るわね、ノンナ」

しかしノンナは返事をせず、槍を振り続ける。いつもの事だった。しばらくして、ノンナの練習が終了する。

「あ、おはようモニカ。今日もいい天気だよ」

ノンナはイタリア語で私にそう言う。ノンナは私に気遣い、2人きりの時はイタリア語で会話してくれていた。

「貴女曇りでもいい天気って言うじゃない。気象予報士だったら懲戒ものよ」

「いや、曇りも天気の一つなんだから、悪い天気って言うのも変かなって思ってる。えへへっ」

ノンナは快活に笑う。大きな目が細め、白い歯を見せる笑い方は、どこか子供っぽい雰囲気まじを纏う彼女にぴったりの笑い方だった。その笑顔を見て、私も頬を緩ませる。

「悪いのがなかったら良いものないじゃない。まあいいわ。それより今日はどうするの？ 欲しい素材が有るって言ってたけど」

「えっと、今日はいいかな。レベリングにしとこ」

「わかったわ」

私は寝巻きからいつもの金属鎧に着替える。前線を張るアタッカーにしては重装備で、籠手の手の部分が無いことを除けば、フルプレートアーマーと言っても差し支えない装備だった。ただ流石にタックが使用しているような隙間を極限まで減らしたタイプではなく、機動性確保のために空いたスペースを鎖帷子くさりかたびらで埋めたタイプだった。

「いつも思うけど重装備だよ。私には無理かな」

そう言うノンナの装備は革製一式で、動きやすさを第一としている

のは明らかだった。

「防具は重さと防御力の最適値で装備すべきよ。速度を殺してはいけないけど、回避にだって限界はあるわ」

いつも口酸っぱくノンナに言っている理論だったが、ついぞ受け入れられた試しはない。まあこの感覚派の天才には何を言っても無駄なのかもしれないが。

「まあいいじゃん。さあ行く。朝ごはんはサンドイッチ用意してあるからさ、歩きながら食べようよ」

ノンナはそう言つて私を急かしながら、ドアの前で足踏みする。この光景もいつもの事だった。

——今日も食べ歩きか。お父様が見たらなんて言うかしら。

脳内でそう愚痴りつつも、私はノンナと外に出る。時刻はちょうど7時、街が動き始める時間だった。

「はいこれ」

ノンナがサンドイッチを渡してくる。肉のスライスが入った、ボリュームのあるサンドイッチだった。私はそれを一口かじる。

「ん、今日もおいしいわ。あとソース変えた？」

「当たり前！ やっぱりお嬢様の舌は誤魔化せないな。私も精進しないと」

ノンナは外食時以外、毎食手作りをしてくれていた。生産職に興味を持たない彼女だったが、料理だけは熱心だった。

歩きつつサンドイッチを食べ終わると、ノンナは手を差し出してきた。私は無言で彼女の手を握る。私より一回り小さい手、働きの温かい手を握りながら、私は言う。

「手繋いでると歩きづらくない？ 無理しなくてもいいのよ？」

「なにを！ これだから高身長は。別に小さくたって歩幅合わせられないわけじゃないやい！」

ノンナが頬を膨らませながら反論する。ノンナの身長は日本人女性の平均身長から考えても小さめで、145cmだった。176cmある私とは30cm強の差があり、手を繋いでいるだけでかなりの身長差を感じる。

「身長が小さいってだけでみんな私を子供扱いするんだ。だいたい私もう20だよ。立派な大人なのに」

ノンナはぶつぶつ文句を言う。その様子が可愛らしく感じられて、笑みが溢れてしまう。

「ふふつ。大丈夫よノンナ。背が小さくても大人にはなれるわ」

「なんだと!」

ノンナはそれほど怒っていない様子で、繋いでいない右手で私をポカポカ叩く。

「いいもん。背高くておっぱいも大きいことなんて、別にうらやましいなんて思っていないし」

ノンナはほぼ言っているような愚痴を零してそっぽを向く。

「ごめんって。さ、転移門に着いたわよ。機嫌直して」

私たちはいつものように会話をしながら、転移門を使用する。だがこれが、ノンナにとって転移門の最後の使用になった。

+

「ノンナ! そっち行つたわ」

「オツケー。せいやつ!」

ノンナは単発技両手銃スキル《スイフト・レンジ》を使用し、正面のトカゲ人間を屠^{ほぶ}る。その隙に、私の方からノンナの方へ向かったトカゲ人間が、ノンナに斬りかかる。

ノンナは、体格差上切り下ろしになる斬撃を、槍を横にして両手で防ぐ。

「よつと!」

そして、上半身をひねるようにして、石突き側をトカゲ人間の側頭部に叩きつける。槍はそのまま回転させ、穂先を前方へ向ける。

たたらを踏んだ所を、槍を構え直したノンナが、喉に刺突を叩き込んだ。その一撃を受けて、光の破片となって爆散した。

「相変わらず見事な技ね。本当に槍術習ってなかったの?」

私の称賛の言葉に、ノンナは照れ臭そうに後頭部を掻く。

「別にそんなんじゃないよ。SAOに来てからの我流だってモニカも知ってるじゃん。1年も槍を振ってたら、誰だって上手くなるよ」

ノンナは槍の名手だった。親友の身内みうちびいき鬮を差し引いても、槍の腕前では並び立つ者は居ないのではないかと私は思う。実際に私はノンナ相手にデュエルで一度も勝ったことはないし、ノンナがデュエルで負けたことは見たことが無かった。

「私より凄い人はいっぱいいるよ。ほら、前挨拶したキリトくん。彼の動きなんて超すごかったじゃん。ボス相手に攻撃をパリイし続けて近距離で殴り合うなんてさ、私には真似できないよ」

「そう言っつて貴女。その時にMob4体相手して完勝したじゃない。あれやられて謙遜されても真実味に欠けるわ」

「別に、周りをちゃんと見て動けばできると思うんだけどな」

そう言っつてノンナは小首を傾げる。自分が優れているという自覚はまるでないようだった。私はやれやれとかぶりを振る。

「実際にあちこちから勧誘来てたじゃない。青龍連合も解放軍も幹部直々だったし、血盟騎士団に至ってはヒースクリフ直々に勧誘されて。これで優秀じゃなかったら、誰が優秀なのよ」

実際、攻略組に参加するたびに勧誘の声をかけられている始末だった。しかし、それも当然だろう。数少ない女性プレイヤーな上、可愛らしい容姿をしている。そして触れることすら叶わぬ回避能力とそれと表裏一体のカウンター。まるで全ての動きが攻撃と錯覚するノンナの動きを見れば、誰だっつて仲間に誘うだろう。

「うーん、ギルドに誘われてもなあ。私、集団行動っつて嫌いだし。私いつつもみんなの事怒らせちゃうから、そんな私が凄いはずないと思うんだけどな」

たしかにノンナに対して辛く当たる人も多いただろう。彼女の行動が、いわゆる「ぶってる」と取られやすいのも知っているし、純真故に空気を読まない面や、愛らしい風貌が嫉妬を買ったりする。そういう事が多いのも理解できるが、彼女の自己評価の低さには納得がいかなかった。

「ノンナ、貴女は凄い人よ。真面目で、努力家で。才能におご驕らず努力して、人助けを忘れず。辛い時も頑張るし、物を穿うがった見方をしない。その内きつと貴女の良さをみんな理解するから、もつと自信を持つ

て」

「そんな、モニカ言い過ぎだよ」

ノンナは赤くなつた両頬に手を当てて俯うつむく。だが、語尾がニヤけた口調になっているのはつきりとわかつた。

「えへへ、じゃあ行こっか」

狩りを再開すべく、私たちは歩き始めた。ノンナは私の前を意気揚々と歩き、鼻歌まで歌っていた。

——ああ、幸せだな。

モンスターが出るとはいえ、木漏れ日の心地よい森の中、最愛と言つてもいい親友と2人歩く。友と言える存在を持たなかつた私にとって、ノンナとの日々はかけがえのない物だった。

きつとこの胸に去来する感情を、愛と呼ぶのだと思う。祖母にも感じていた、強く暖かい感情。未だ慣れない物だったが、私にとつては真冬の暖炉の熱のように心地よく感じられた。

しかしそんな幸福も長くは続かなかつた、私の聞き耳スキルが遠くからの戦闘音をキャッチした。

「ノンナ。東の方で誰か戦つてるけど、様子見に行く?」

「うん、様子だけでも見にいこっか」

そうして戦闘音のする方へ向かうと、ある一団がトカゲ人間の群れと戦闘しているのが目に入った。あまり戦況は芳しくないようで、苦戦を強いられている。

「わー! すごい苦戦してるよ。助けようよモニカ」

即座に助けに入る事を進言してくるノンナ。だがしかし、私は別の疑念に駆られていた。

——あいつ、アキラよね。あんな腕のいいプレイヤーが居て、なんで苦戦するのかしら? それに、複数名対人慣れしてる奴がいるのに、あきらかに手を抜いてる。

理由がわからない。あの場面で手を抜く理由は無いはずだ、なのにどうしてだろう? その疑問が私の頭の中でぐるぐる回る。

「ねえモニカ。早く助けようよ。危ないよ」

ノンナが切羽詰まつた様子で言う。たしかにHPが危なそうなプ

レイヤーは居る。だが、手を抜いてる以上、キナ臭さが拭えない。

「モニカ、早く」

決して独断専行をしないノンナだが、この時ばかりは今にも走り出しそうだった。そんな友の様子を見て、私は仕方なく言う。

「わかったわ。でも助けたらさっさと別れるわよ。どうにもキナ臭いわ」

「うん！」

私の言葉が言い終わるが先か、返事と共に駆け出すが先か。そんな様子でノンナは疾風のように駆け出す。私もややあつて後を追う。

この時、ノンナを意地でも止めていたら、話が変わっていたかもしれない。私はその入団を勧めていたら、話は変わっていたかもしれない。私はその後悔する事になった。死ぬまで、おそらく死んでもずっと。

過去② 正直者は馬鹿を見る

「いや助かったぜ。ありがとな」

アキラが握手のためか、ノンナに右手を差し出して来る。私たちは戦闘に介入し、状況の悪かったプレイヤーを救出した。その結果、パーティーリーダーたるアキラが礼を言ってきた。

「いやそんな。当然のことをしたままでですよ」

そしてノンナは、その手を握った。彼女は照れた表情で、明るく笑っている。

握手が終わると、私に話しかけてきた。

「そちらのお嬢さん、たしかモニカさんだったろ。アンタもありがとな。いい腕だったぜ」

「別に、お節介にならなくて良かったです」

私は気を抜かず、アキラを見据える。どうにもこの男は気持ちわるい。普通に見れば、格闘家を思わせる獰猛どつもうさと精悍せいかんさをあわせ持った好青年に見えるだろうが、なぜか私には牙を剥き出しにした肉食獣の様に思えてならなかったのだ。

「そう警戒なさんな。別にとつて食おうってわけじゃないんだぜ」

アキラはそう言って笑うが、私の中の警戒心は薄れる気配を見せない。

——なぜかしら。疑り深い性格だって自覚はあるけど、何度か面識があつて、何か悪いことをした訳じゃない。攻略組として貢献しているアキラに、どうして私はここまで嫌悪と警戒心を抱くのかしら？

私が警戒の姿勢を崩さずにいると、ノンナがやんわりと注意をしてくる。

「だめだよ、モニカ。アキラさんだって別に悪い人じゃないんだから、もっと友好的に接しなきゃ」

「ノンナ……」

本当に考えすぎなんだろうか？ たしかにまだアキラへの警戒を抱く理由がないが、それでも警戒を解く事ができなかつた。

「まあいいさ。俺くらいタツパがありやそりや怖く見えるもんだしな。悪いな、怖がらせちまって」

アキラは笑う。それに釣られて、彼の周囲のパーティーメンバーも笑っていた。なごやかな風景だった。

「それは置いといて、だ。ノンナさん、虫がいい話だが俺たちのパーティーの狩りを手伝ってくれねえか？　ここには新米のレベリングに来たんだが、どうにも手が足りない。報酬は弾むからどうか頼めないか？」

アキラは頭を下げる。ノンナは迷った様子で、私の方を向く。

「どうする？　みんな困ってるみたいだし、私は助けたいなって思うんだけどな」

「私は反対よ。アキラさんは青龍連合の幹部だし、ギルドメンバーを連れて来ればいいじゃない。危機は脱したんだし、私たちが長々と付き合う理由がないわ」

言葉を言い切って初めて、自分の言った意見に驚く。私は別に普段はここまで排他的な人物ではなかった。普段は進んで人助けをするタイプだと自認しているし、この依頼の条件自体は悪くないように思えた。だが、それを踏まえた上でこの言葉が自然と出てきた。それほどまでに、アキラへの警戒と嫌悪は強かったのかもしれない。

「それができりやもうちよいマシなパーティーで来てるさ」

私の言葉を聞いたアキラが、頭を上げて言う。

「どういうことですか？」

アキラは苦々しい顔をして、その質問に答える。

「このパーティーは青龍連合の団員で構成されている訳じゃねえんだ。アイツは解放軍所属だし、コイツはそもそもギルド所属じゃない」

アキラが指差したプレイヤーはぺこりとお辞儀をする。なるほど、たしかに青龍連合関係者で狩りに来ていないのであれば、ギルドの権力を使用するのはまずいだろう。

「自分のギルドメンバーでもない相手のレベリングに付き合っているって訳ですか？」

「そうだ。後進を育てるのも先駆者の務めだろ」

一理ある、そう思ってしまった。アキラの考えは立派なものだ。ノブレスオブリージュを実行している彼の行動を否定する事はできない。その行動を怪しいからと言って、非協力的な態度を取ろうとしている自分が急に浅ましい存在のように思えた。

「わかりました。そういう事なら、今日限りですよ。ノンナもそれでもいい?」

「うん、ありがとモニカ」

私はため息をつく。呆れや気苦労から出た物ではなく、自分の中の疑念を吐き出すためのものだった。

「そうか。感謝するぜ。ありがとな」

アキラはもう一度頭を下げたあと、パーティーメンバーの方へ向かう。説明をしに行った様子だった。

アキラが向こうへ行つたのを見計らって、ノンナが近づいてくる。

「ごめんね、モニカ。私のわがままを聞いてもらって」

ノンナは落ち込んだ様子だった。嫌がる私を巻き込んでしまったと持っているのかも知れない。

「別に、私は自分の意思で決めた事だから。そんなに気に病まないでね」

「わかった。ありがとね。今度私がモニカのわがまま聞いてあげるからね。なんでも言ってるね」

ノンナが笑う。それに釣られて私も笑ってしまった。

「ノンナ。それで私が無茶な事を要求したらどうするのよ。あんまりなんでもとか言っちゃダメよ」

私の言葉に対して、ノンナは少しも悩まずに言い返す。

「大丈夫だよ。モニカは私の嫌がる事しないもん。それに、私はモニカに何されても嫌いにならないから。だからなんの問題もないよ」「っ!」

なぜか私は顔を背けてしまう。なぜだろう。顔が熱いような気がする。別にこれは照れている訳ではない。きつとそうだ。まっすぐ好意を向けられた経験がなかったから、慣れない感情に振り回されて

いる訳では決してない。

「そういう無条件の優しさを利用する輩がいるかもしれないって意味よ。もう。利用されてからじゃ遅いのよ」

「はーい」

変わらず花の咲いた様な笑みを私に向けるノンナ。私はそれを見て、自分の心が癒されるのを感じていた。

†

私は敵Mobに対して刺突を放ち、絶命させる。戦闘は一段落したようで、おのおのが緊張を解いた様子だった。

その中で、私に話しかける男がいた。

「すみません、モニカさん。ちよつと聞いてもいいですか？」

「いいですよ」

彼は解放軍所属と紹介された、ワルサーという男だった。年の頃は30代半で、温和そうな人格が窺える容姿だった。

「モニカさんは何故、ソードスキルを使わないんですか？　かなり戦闘慣れしてる様子なのに、何か戦闘の秘訣とかがあるのでしょうか？」

「別に使わない訳じゃないですよ。モーションアシストの感覚が嫌いなのと、システム補正頼りで戦う事に不安を感じるだけです。どうにも、私は神経質なタイプみたいです」

ワルサーは頷いて話を聞く。真面目な日本人らしい仕草だった。私の話が終わってすぐ、さらに疑問を口にする。

「システム補正頼りで戦う事への不安とは、どう言った意味でしょうか？」

「システム補正のある攻撃って、ある程度は軌道が読めるんですよ。ソードスキルなんかは出す技が決まっています、構えと発光エフェクトで相手に使うスキルが伝わってしまいます。もしスキルを読み切れる相手とPvPをする事になったら、ソードスキル無しの戦闘ができないと勝ち目が無くなってしまいます。まあ、読めないように使用すれば良いだけの話なので、所詮は下手くその杞憂きゆうですよ」

私の言葉に大仰に首を振りながら、ワルサーは言った。

「いえいえ。物凄くお上手じゃないですか。特に武器防御の上手さは初めて見るレベルかもしれない。まだお若いのに、私よりずっと立派だ」

「貴方の片手剣術もいい腕ですよ。攻撃していいタイミングとしてはいけないタイミングをきちんと読んで攻撃できるみたいですし、これからきつと伸びますよ」

ワルサーは笑みを浮かべた。誠実なビジネスマンを思わせる表情だったが、どこことなく人の良さを感じさせた。

「その、今日の狩りの間だけで良いですので、これからも質問をしても良いでしょうか？ 私はどうしても強くならなくちゃいけないんです」

「良いですけど、なぜそこまで？」

ワルサーは命をかけた闘争を好むタイプの人間には思えなかった。無力である事を嫌う私や、とんでもないお人好しのノンナと違い、彼はごく一般の人物。命を賭してまで何かをしようとする人物には見えなかった。

「家族が待っているんです。妻と子供が居まして。子供はここに来る前に反抗期に入ってしまったので、多感な時期だからこそ、そばにいてやりたいのです。妻も私が寝たきりでは苦しい状況に立たされているに違いありません。だから、一刻も早く強くなって、攻略に貢献したいんです」

ワルサーの表情に曇りはなく、確かな決意を感じさせた。この言葉に嘘はないのだろう。

——立派な人ね。アキラへの疑念はまだ消えないけど、ワルサーのような好人物に出会えただけ良しとしましょう。彼の手伝いをできるのは光栄だわ。

「なるほど。もちろん協力しますよ。そのかわりと言っては何ですが、無理はしないでくださいね。死んでは元も子もありません」

「ありがとうございます」

ワルサーは礼をし、自分のポジションへ戻る。私はその姿を見て、無様な戦いはすまいと決意した。

過去③ 一騎当千の技量あれど、その精神は

私たちは狩りを続け、時刻は夕暮れ時になった。パーティーも解散ムードが漂い、そろそろお開きになりそうだった。

「ねえモニカ。今日はどうだった？」

「どうだったって、何がよ」

「知らない人と組んでみて、だよ。モニカあんまり友達増やそうとしないからね、ちよつと心配で。お節介だつていうのはわかってるんだけど、今日はどうだった？」

ノンナらしい言葉だった。しかし、まるで母親が子供の交友関係の心配をするような言い草に、思わず苦笑してしまう。

「もー。別に笑うところじゃないでしょ」

「いや別に馬鹿にしてるわけじゃないわよ。ただ友達に母親みたいなこと言われるとくすぐったいだけ」

「私の方が数ヶ月お姉さんだから！ そう！ なんとつてお姉さんなんだから！ お姉さんが妹分の交友関係を心配するのは変なことじゃないもん」

そう言つてノンナは胸を張る。胸を張っても背が小さいせいで、ただ単に私を見上げていただけのように見える。まあ彼女が嬉しそうなので良しとする事にした。

「それでどうだったの？」

ノンナが改めて聞いてくる。

「そうね、まあ悪くなかつたわよ。私たちの障害にならない限りは、だけどね」

「そっか」

ノンナの返事は短かつたが、そこには優しさと、少なからぬ安堵あんじょが含まれているように感じた。

——ノンナ、まだあの事を気にしているのかしら？

「ねえ、ノンナ。私がこの世界に閉じ込められた事、気にしてたりしないわよね？」

するとノンナはビクリと震える。相変わらず嘘のつけない人だつ

た。

「いや、だって。気にもするよ。私みたいなのならともかく、モニカみたいにする人がこんな場所に閉じ込められて、人生の計画が狂うなんて。私が誘ったばかりに」

「ノンナ、その程度のことなんて気にしなくていいって言ったじゃない」

私は眉を潜める。胸の底に粘ついた何かは渦巻くような感覚。愛しいとすら思う親友が、こんな些細な^{ささい}なことで心を痛めているのが、私には我慢がならなかった。

「モニカ、あのね——」

ノンナがなにか言おうとした所で。私は抜刀する。

「っ！」

私は、抜刀と同時にノンナへ向かっていた剣を叩き落とす。

けたたましい金属音が鳴り響き、火花のエフェクトが盛大に飛び散る。

「ノンナ！ 構えて！」

私の声に応じて、ノンナは槍を構える。

刺客の得物はかなり細身のロングソード。いわゆるエストックと呼ばれる類のものだった。そして、刺客の頭上に光アイコンはオレンジ色、いきなり攻撃してきた事を含めて、これらが表す事は——

「レッドプレイヤーのお出ましとはね。私、狙われるようなことをした覚えはないんだけど」

私の言葉に、刺客は特に返事をするわけでもなかった。刺客は青眼の構えに似ていて、それよりやや前に突き出した構えを取っている。間合いがとりやすく、相手に剣の長さを錯覚させられる危険な構えだ。おそらく、突き出した剣によって相手を牽制しつつ、リーチを間違えた相手を月で仕留める戦術だろう。

「モニカ、パーティーメンバーが私たち以外麻痺になってるよ」

ノンナが小声で言う。迂闊^{うかつ}だった。どうやら刺客は私たちを生け捕りにしたいようだが、いきなり攻撃するレッドに口クな輩はいない、抵抗するしかなかった。

私たちが動くより早く、背後で気配がする。私が目配せをすると、ノンナが私の背後に回った。振り向かなかったのは、目の前の刺客が目を離れた隙に攻撃してくることを防ぐためである。

私の背後に回ったノンナが言う。

「モニカ、2人新手が来たよ」

「わかったわ」

心の中で舌打ちをする。かなりまずい状況だ。包囲された以上、背中合わせで戦うしかないが、背中合わせは自由な間合いを取ることができない。これは戦いにおいてかなり不利な事だった。

それを察したのか、ノンナが言う。ただし今までのように日本語ではなく、あえてイタリア語であった。

「ねえモニカ。私がこっちの2人を引き受けるから、目の前の相手を怯ませたら離脱してね。私も後を追うから」

それに、私もイタリア語で答える。

「Giusto addosso, Nonna.私にまかせて、ノンナ」

そうして私たちは互いの背中を軽く拳で叩く。身長差のせいで互いの頭と腰を叩くことになったが、気概は伝わった。

ノンナは背後で弾丸のように駆け出し、刺客に一撃叩き込んだらしく、ダメージ音が鳴る。

私は背後はノンナにまかせ、眼前の敵に集中する。

互いの距離は3m程。全力で踏み込めば届く距離だが、そのような事をすれば迎撃されてダメージを受けるだろう。攻撃を当てるには、近くか、何かしらの工夫が必要だった。

——出し惜しみをしている状況じゃないわね。やるしかないわ。

私は腰のベルトから棒手裏剣を抜き、手裏剣術単発スキル《花車》を発動する。野球の投擲フォームにも似た、全力投球の構え。

投擲フォームは大きな隙になるが、いきなり投剣スキルを使用するとは思っていなかったせいで面食らったのか、攻撃はしてこなかった。

私は棒手裏剣を投擲した。おそらくエストック使いの刺客は、自分の得物で弾こうとしたようだが、失敗する。普通の投剣スキルより速

度が速い手裏剣術の面目躍如だった、だがそれ以上に期待した効果があつた。

花車の攻撃を受けた刺客は、重心を崩してのけぞる。これが花車の特殊効果のノックバックだった。ただしあまり強い効果ではなく、重装備の相手には効果がないが、この刺客のような軽装な相手には効果は抜群だった。

スキル使用後の硬直時間から解放された私は、相手が姿勢を崩している内にソードスキルを発動する。

左手を前に出し、右手の剣を肩に担ぐようにして大きく引く構え。片手剣単発スキル《ヴォーパルストライク》の構えだった。それと同時に私のバックソードが赤色の光を放ち、回転数の上がつていくジエットエンジンのような効果音を発する。

相手がノックバックから回復したようだが、もう遅い。剣を構えられていない以上、私の剣が止められる理由は無い。

「せあッー」

スキルアシストの効果に背中を押されて加速する。その勢いのまま、刺客の心臓を貫いた。現実と違い、心臓を貫いたからといって即死するわけでもないの、硬直が解け次第私は素早く剣を引き抜き、地面を蹴って距離を取った。その瞬間、先ほどまで私がいた場所に、エストツクの力任せの斬撃が放たれる。

刺客のHPバーを見るに、この一撃で半分は削れたようだ。その上、相手は金属鎧の私に対して、エストツクで斬撃を行なってしまう程に動揺している。勝負は優勢だった。

相手が斬撃の姿勢から回復するより早く、私はエストツクを握る手を片手剣単発スキル《スラント》を使用して斬り付ける。すると、相手の腕は切断されて剣の重みによって落下する。

私は硬直が解けたのち、片手剣単発スキル《ホリゾンタル》の構えを取った。

「待ってくれ、降参する！ 助けてくれ！」

刺客が降参の言葉を言ったが、さすがにそれは受け入れられない。背後から攻撃されたら困るからだ。

私は刺客の首にホリゾンタルによる水平斬りを当てて切断する。これで刺客のHPが全損し、刺客は青い光のかけらとなって爆散する。

地面に刺客のがシステムウインドウに戦利品として表示されるが、重量を増やしたくはないのでキャンセルし、その場に捨て置く。

私は振り返り、2人と戦うノンナへと加勢するために走る。ノンナは優勢のようで、2人の刺客はHPバーが赤色に突入していた。

しかし様子が変わる。ノンナはあと一撃で倒せる刺客を攻撃せずに、ひたすら守勢に回っている。そうこうしているうちに、刺客の1人が回復アイテムを使おうとした。

「させるかッー」

私は再び花車を使用し、回復しようとした刺客を射抜く。その刺客は先ほどと同じように青い光のかけらとなって爆散する。その後、もう1人の刺客にヴォーパルストライクを命中させて、他2名と同じように爆散させた。

これでひとまずは敵を掃討できた。まだ増援があるかも知れないため、梟は抜いたままにしておく。

「気を抜いちゃダメよノンナ。さっきのは危なかったわよ」

やんわりと、嗜めるようにノンナに言う。言われたノンナの顔は青く、震えているように見えた。何かを恐れているような、怖がっているような表情だった。

「大丈夫？ 辛いのはわかるけど、さっさと転移結晶使って逃げるわよ」

そう言って私が腰のポーチから転移結晶を取り出すと、ノンナが口を開く。

「ねえ、モニカ。嘘だよね。嘘だよね」

震える声で、しかし電脳世界ゆえかはつきり聞こえる声で言う。

「どうしたの？」

私の問いに、ノンナが私の顔をすぐるように見て言う。

「殺したなんて嘘だよね、モニカ。あの人たち、あんなエフェクト出たけど、嘘だよね」

納得した。要は人を殺した事実には耐えられないのだ。ノンナを安心させるために、私は言った。

「大丈夫よノンナ。とどめを刺したのは私、殺したのも全部私よ。貴女のせいじゃないわ」

なるべく優しく言う。ノンナは優しすぎる所がある。まあそれが彼女の魅力なのだから仕方がない。

しかし、私の言葉に、ノンナが嗚咽混じりの声で言う。

「違うよ！ 私のことじゃなくて。モニカが、人を殺しちゃったじゃん。3人も。私が攻撃するのをためらったから」

よくわからない。たしかに人を殺すのは最低の行為だし、最も行なってはいけないことだとは思いますが、今はそれを議論している場合ではない。

「ノンナ。それは後で聞いてあげるから。とりあえずここを離れましょう」

その言葉もあまり届いていないようで、ノンナは首を振るばかりだった。

「ごめんなさい。私のせいで、ごめんなさい」

そう呟いてへたりこむ。確かに殺人を含む対人戦は初めてだったが、ノンナがこうなるとは思ってもいなかった。

まあいい、別に私が転移結晶を使用すれば、ノンナも一緒に転移するのだ。さっさと転移してしまおう。

転移結晶を使って2人でこの場を離脱しようとした時、風切り音が鳴る。私はその方向へ向き、飛んできた飛翔物を剣で叩き落とした。

その方向からまたイエローアイコンの刺客が現れた。増援か、苦戦した時の控えだったのか。今度は数を増して4人だった。

「ノンナ立って。こいつらをどうにかしてから帰るわよ」

私は剣を構える。さすがにノンナもへたりこむのをやめ、立ち上がって武器を構えた。

動揺していようと槍の達人であるノンナと、手裏剣術という切り札を持つ私のコンビ相手に1人増やした程度では、先程の焼き増しになる。そのはずだった。あの男が現れるまでは。

過去④ 平穩の落日

続け様の大人数戦ではあったものの、思いの外事は順調に進んだ。ノンナの攻防一体となった槍術の技法は、刺客の攻防のリズムを破壊し、3対1となった今でさえ、優勢を保っていた。

私も1対1で確実に相手をつぶし、その援護に回る。私が担当していた刺客を倒し、ノンナの方を振り返る。

その時、声がした。

「おーい。今助けるぞ」

走っているのだろうか？ ガチャガチャと鎧の動く音と共に、アキラの声が響く。

私も加勢に入るために走る。2人が援護に加わる姿を見て余裕が出たのか、ノンナの顔に安堵あんどの色が灯る。

そしてアキラはソードスキルを使用し、ノンナの援護に入ろうとする。両手剣スキルでは比較的有名で使い勝手の良い突進技である、両手剣単発スキル《アバランシュ》だった。

一瞬、ノンナに命中するかと思うほどギリギリの位置に突進し、刀を持った刺客を吹き飛ばした。その細かい操作に、アキラの剣の操法の上手さが現れていた。

「ありがとう——」

ノンナが忙しい中、礼を言おうとする。だがしかし、アキラの動きが変だ。ノンナに右半分背を向けた状態で固まっている。そして剣に灯るソードスキルの発動を告げる光。

「避けて！」

私は半ば反射的に叫ぶ。あの構えは間違いなく、両手剣単発スキル《バックラッシュ》だ。右半分背を向けた姿勢から、反時計回りに剣を水平斬りにする技。その技の攻撃ルートに、間違いなくノンナは巻き込まれる。

「っー！」

私の声に反応したのか、ノンナはギリギリの所で字面に穂先を突き刺して固定し、攻撃を防いだ。

私は片手剣単発技《レイジスパイク》の突進でアキラへ攻撃する。ノンナは今、槍を字面に突き刺している状況だ。短槍による攻防一体の戦法をとるノンナにとって、武器を動かせない状況は致命的だった。

そして突然、私の体が宙に浮いた。なんの比喻でもなく、突然高さ数メートルに放り上げられる。そして遅れてやってくる痺れの感覚。そこで私は、先ほどアキラに吹き飛ばされた刺客が、刀単発スキル《浮舟》を使用したことを理解した。

軽業スキルがあるわけでも体操選手でもない私は、なすすべなく放物線を描いて飛ぶ。そして放物線の落下地点へ向けて、刺客はスキルを別のソードスキルの構えをとる。

くるくると無様に回転しながら落下する私にスキルの補正を受けて突進する刺客。間違いなくこの方法で何人かを殺してきた相手だろう。私はムーンサルトキックを放つ体術スキル《弦月》を発動する。途端にスキルの補正によって私は方向補正を受け、相手の頭部へ吸い込まれていく。しかし相手もさるものなのだろう。スキルを急遽きゅうきょ中断し、ボクシングのダッキングのように屈むことで蹴りを回避する。

だが私の狙いは蹴りだけではなかった。スキル補正による方向修正そのものにあつた。不規則な回転運動から垂直方向のみの回転運動に切り替わった私の体は、うっ伏せの姿勢で地面に叩きつけられる。

刺客はうっ伏せの私に追撃を放つが、横に転がる形でこれを回避する。

立ち上がった私は、ようやく周囲の情報を手に入れる事ができた。アキラに押されている様子のノンナ。他の2名の刺客はなぜか傍観に徹しているが、それでもノンナが劣勢なようだった。ノンナはいつも通り攻防一体のスタイルで戦っているが、アキラの連打に押されているようだった。

アキラの戦法は、攻撃が防衛に繋がるのではなく、攻撃が攻撃に繋がる戦法である。馬鹿の一つ覚えの戦法に見えるが、一切途切れる事

なく両手剣の斬撃が襲ってくる状況だ。その上連打を途切れさせず、必要箇所^に当てるアキラの操法あつての技だった。

「いやー、強いわねあの子。リーダーが駄々こねるのもわかるわ」
私と戦っている刺客が喋る。幼気な雰囲気と、妖艶な響きを兼ね合わせた女の声。しかし話している余裕のない私は、刺客に斬りかかった。

刺客はそれに応じて斬撃を放ち、つばぜり合いになる。

「うふふ、まあ待ちなさいな。一緒に観戦しましょう。リーダーの攻撃をあれだけ凌げるなんてあの子すごいわ。きつと面白い戦いが見れるわ」

刺客は楽しそうに言う、リーダーというのはアキラのことだろう。この刺客はアキラとグルだったのだ。

——笑ってんじやないわよ、この異常者。

「はあっ！」

私は体格の利を活かして、上から体重をかけて刺客の首筋に刃を当てて撫で斬りを狙う。しかし相手もこの攻撃を読んでいたのか、後ろに引くことでこれを回避する。

「まったく、話を聞かない子ね。人の誘いを断るにしても剣を振り回すことないでしょう？ 傷ついちゃうわ」

刺客は、どこか嘲笑的だが、本当に楽しそうな声で言う。本物の人との殺し合いを楽しんでいるような、異常者らしい声。

「まあいいけどね。ガッツについて貰えるのは好きだし。最初から私は貴方狙いだつたから」

私は今度は棒手裏剣を取り出す。スキルは使わない。悠長にスキルを発動していたら、間違いなくバレてしまうからだ。

「貴女って本当に綺麗だわ。初めて見たときからいいと思ってたわ。おっぱいも大きいし、脚の肉付きもいい感じよね」

私はアンダースローで2本の棒手裏剣を投擲する。しかし、相手はひらりと身を翻すと——

「よつと」

刺客は身につけていた外套を投げ、棒手裏剣を防いだ。仮面ごと外

したのか、その姿と顔が露になる。

「貴女の手先の器用さも、特技がジャグリングな事だつて割と有名な事じゃない。その手は下調べしてる相手には通じないわよ」

刺客は私より小柄で、ノンナよりは高い程度の低い背丈。肩ほどで切った髪がさっぱりとした印象を与えている。童顔に低い背丈が子供のように思わせるが、蠱惑的な声の響きと優雅に微笑む表情が、退廃的な魅力を放っていた。

「あら、そういえば名乗りがまだだったわね。私はアリサ。こういう事をしている時の名前だけどね。貴女が私の女になったらプレイヤーネームと本名を教えてあげるわよ」

アリサと名乗った刺客はそう言つてウィンクする。奇行としか言えない敵の行動に、私は考え直す。

——所詮は好き好んで犯罪を犯す異常者の行動でしょ。理解しようとしても無駄だわ。

既に戦法が割れている以上、奇襲は不可能だろう。私はスキルを使わず、棒手裏剣を再び投擲した。

アリサがそれを躲なり防ぐなりすれば、確実に隙ができる。スキルを使用していかない以上、続く攻撃の斬撃も軌道が読めないはずだ。アリサに一撃を入れ、そのままノンナの救出に向かおうとした。だがそれは失策だった。

「つと」

そもそも、この行動はアリサが躲すか防ぐかを前提にした行動だ。アリサもそれを読み取つたのだろう。アリサは躊躇なく、踏み込み突きを放つた。アリサの体に棒手裏剣が刺さるが、所詮スキルなしの投擲なので、大したダメージにはなっていない。

「フッー」

だが私とてこれを予想していないわけではない。私はアリサの突きを、ハンドガードで殴るようにして防ぐ。そうすることで私の体はアリサの刀の直線状から外れ、攻撃されない位置になる。

私は左手で体術スキル《閃打》を発動し、顔面を思い切り殴りつける。これはクリーンヒットしたが、アリサは姿勢を崩したただけだつ

た。

好機は長く続かない見た私は、ソードスキルを使わずに致命傷を狙おうと喉を狙った突きを放つ。

その瞬間、アリサと目が合う。その瞬間、今まで笑顔を浮かべていたアリサが眉を潜めた。

「――」

次の瞬間、私は悲鳴を上げる間もなく地面に倒れ伏す。アリサの握る刀にはソードスキルが発動したことを示す光が点っている。あの一瞬で姿勢を整えて、おそらく浮舟とは別の斬り上げ系刀単発スキル《幻月》を使ったのだろう。

その結果、私は股から右足を斬り上げる形で切断されたようだった。鎧が存在せず、ごく薄い鎖帷子の守りしかない股を狙った斬撃であつた。

スキルの硬直から回復したアリサが独り言のように言う。

「はあく。タイプの子の体傷つけるの好きじゃないのよ。ましてあんないい脚を斬り飛ばしちゃうなんてね。大丈夫だった？」

アリサは私を覗き込む。悪意のかけらもない、純粹に心配したような表情。相変わらず行動原理は理解不能だが、私に直ちにとどめを刺そうと言う気ではない事はわかつた。

私が残った左脚に力を入れて前に進もうとすると、体に衝撃が走る。それはアリサが私の体に馬乗りになった衝撃だった。

「本当にもう、妬げちゃうわね。そんなにあの子が大事かしら。まあもうすぐ決着みたいだし、一緒に見ましよう」

私はもがくが、動くことができない。視線の先ではアキラの両手剣の攻撃を必死に防ぐ、ノンナの姿がある。

「ほんとに粘るわね。槍とモンタンテじゃ相性悪いのに」

アリサがどことなくそう呟く。その言葉通りか、ノンナは必死に攻撃を防ぎ続けたが、ついに槍の方が限界を迎え、爆散する。

そこに今まで傍観に徹していた2名が襲いかかる。攻撃に麻痺毒が付与されていたのか、ノンナが麻痺状態になって倒れる。

「さて、ゲームセットね。さあモニカ。私たちのアジトに案内するわ。

とりあえずこれに乗ってね」

アリサが私の上から退いて、アイテムストレージから担架を展開する。準備を進めながらアリサが言う。

「動かないでね。私は貴女は絶対に殺さないけど、別に向こうのノンナちゃんはどうでもいいのよ。どうせリーダーも一回勝てば飽きるだろうし、下手に動くとおの子殺すから」

そうして私は抵抗できぬまま、アキラ一味の味とに連れ込まれた。

過去⑤ 色彩の消えた日

その後、私たちが連れてこられたのはM o bがポップしない安全地帯となっている洞窟だった。襲撃により麻痺させられた者もここに集められたらしく、全員が知った顔ぶれだった。

ストレージにあるアイテムの提出を要求され、武装も取り上げられた。今いる部屋は出入り口が一つしかない大部屋で、出入り口に武装した歩哨ほしやうが立っていた。

私が部屋に入れられてしばらくすると、誰かが寄ってきて話しかけてきた。

「モニカさん、無事だったんですね」

話しかけてきたのはワルサーだった。

「ええ。貴方も無事なようで良かったです」

ワルサーは安堵した様子を見せる。私の生存を喜んでくれているのだろうか？ だとしたら本当に人の良い男である。

「それでワルサーさん。この襲撃について何か心当たりはありますか？」

するとワルサーは首を横に振った。

「申し訳ありませんが何が何だか。いきなりレッドプレイヤーに拉致されて、ここに閉じ込められただけです。今も正直現実を受け入れられていません」

「そうですか。アキラについて何かご存知ですか？」

「アキラさんですか？ ここには連れてこられていませんが」

ワルサーは心配そうな顔で言う。この様子ではアキラが主犯である事を知らないようだ。

——となると、アキラの本来の仲間はそのレッドプレイヤーどもで、このパーティーはただの獲物だったってわけね。反吐が出るわ。それにまだノンナはここに連れてこられていない。その事が気がかりで仕方がなかった。

するといきなり派手な音を立てて扉が開いた。ぞろぞろとレッドプレイヤーの連中が入ってくる。そしてその後から、この犯罪集団の

首魁しゅがいであるアキラが入室して来る。そして台のように高くなつているところに立つ。

「アキラさん… どうしてここに？」

困惑するワルサーや周囲を横に、私はレッドプレイヤーの面々に疑問を抱く。

——アリサとか名乗っていた奴が居ないわね。まるでアキラの一味みたいな口ぶりだったけど、実は違うのかしら。それとも門番でもやらされてるとか？

私がそんな事を考えていると、アキラはいつものような口調で話始める。

「あー、悪いなお前たち。お前らの困惑は最もだ。本当に申し訳ない事なんだが、俺はレッドギルドのリーダーなんだ」

その言葉に、ワルサーが怒りの声を飛ばす。

「裏切ったんですか！ どうして？ 信じてたのに！」

周囲の困惑が大きくなる。対するアキラは本当に申し訳なさそうな素振りで言葉を続ける。

「いやすまん。本当はお前らを一人前に育てるのも悪くないと思ってたんだぜ。でもな、どうしようもない理由があったんだよ」

「どうしようもない理由？」

ワルサーが答える。

「ああそうだ。本当にどうしようもない理由だ」

アキラはそう言って、深刻そうな声色で言う。

「俺がお前たちを殺やりたくなつたんだよ」

驚愕か困惑か、あたりが死んだように静かになる。それを意味が通じていないと受け取ったのか、補足を付け加えた。

「ああ、いや。お前らを殺したいって言うのは誤解が生じるな。正確にはお前たちを殺し合わせたと思って思ったんだ」

静寂を肯定と受け取ったのか、アキラは話を続ける。

「俺はさ、思ったんだよ。攻略組の未来を担うであろう人材が、ギルドの垣根を越えて切磋琢磨する。それはとても素晴らしい事だ。友情が生まれ、絆きずなが生まれただろう。目覚めた愛もあつたろう。そういう

通常では生まれなかった関係は劇ドラマティック的なものだ」

アキラは自分の言葉に酔い、まるで悲劇の主人公であるかのように言う。

「ああ、だからな——」

大仰に間を挟んで——

ドラマティック

「劇的にぶっ壊してやりたいと思っちまったんだよ、俺は。確かにお前らに将来性を感じてたんだぜ。きっと将来の攻略組を担ってくれるってな。でもなあ、俺ってやっぱりどうしようもない奴なんだよ。お前らの友情や絆を見ている内に、派手に散って欲しいって思っちまったんだよ」

「劇的に生まれ、劇的に散る。素晴らしいと思わないか？ 俺はそのチャンスを逃せない質なんだよ。まったくどうしようもない」

アキラは盛大笑い言う。

「な？ どうしようもない理由だったろ？」

その言葉を最後にアキラはゲラゲラと笑い出す。その声を皮切りに、今まで黙っていた面々が口を開いた。

「ふざけるな！ てめえの勝手な嗜好で殺されてたまるか！」

「信じてたのに！ この変態！ 早く帰してよ！」

「黙れクソ野郎！ 信じた俺がバカだった！」

皆が口々に罵倒を浴びせる。その罵声を浴びながらアキラは満足気に頷き、部下に合図する。

そうすると部下はAとZまでが描かれた布を持ってきて、壁にかけた。そこにアキラが投剣を構え、投擲する。その投剣は綺麗にMの字のところに当たった。

「よし、じゃあマルガメ。こっちに来て」

マルガメと呼ばれた男性がびくりと震える。先ほどの騒ぎの中でも黙っていた人だった。日常生活で人混みの中に紛れていたら、誰の記憶にも残らなそう顔立ちをした少年だった。

「ほら、いいから来いよ」

アキラはそう言うが、マルガメは震えて動けない様だった。仕方なしとアキラは部下に合図をする。

すると部下は私たちの中に分け入って来て、マルガメの前に立つた。

「へ？」

マルガメが怯えた様子で顔を上げる。すると、部下はいきなり抜剣しマルガメの胴を斬り払った。

「うああああああ！」

マルガメは情けない悲鳴を上げる。怯えて蹲ったマルガメに、部下は容赦なく命令する。

「立て」

マルガメは怯えからか恐怖からか、言われた言葉を理解できていない様だった。

部下は苛立ったようにもう一度剣を振り上げ、振り下ろした。今度は周りから悲鳴が上がる。

「わかりました、わかりましたから。立てばいいんですか？」

マルガメは震える足で立ち上がる。それに部下は命令をする。

「歩け」

マルガメは震える足で壇上へと上がった。それを確認したアキラは、次の指示を飛ばした。

「おい、ワカを連れて来い」

今度はワカと呼ばれた、先ほどアキラに文句を言っていた女性だった。女性の私から見ても容姿端麗で、男女比の偏ったアインクラッドではさぞ引く手数多だろう。

そしてアキラの部下が、マルガメの時と同じようにワカに向かって抜剣する。それを見たワカは恐怖に裏返った声で言う。

「わかったわよ。壇上に行けばいいんでしょ？」

そうしてワカは壇上に上がる。壇上に上がった彼女はアキラに向かって言う。

「上がったわよ。次はどうすればいいの？」

声が震えている。怯え故の従順さなのだろう。そんなワカに対して、アキラは菓子でも手渡すかのような気軽さで、ある物を渡す。

それは片手剣だった。

狂気を差し出し、気軽な口調でアキラは命令する。

「ワカ、こいつを殺せ」

ワカは首を振って言う。

「できるわけないでしょ。だってそんな、人殺しだなんて」

その様子を見てニヤつきながら、アキラは言う。

「二つに一つだぜ。お前がマルガメを殺すか。俺がお前を殺すか。マルガメがそんなに大切なら大人しく俺に殺されてくれりゃ良いぜ。お前の自由意志さ」

ワカの動きが固まる。死の恐怖と、人を殺す恐怖の板挟みになっていくようだった。それを見て、アキラはさらに楽しそうに言う。

「嫌か？ 最近マルガメの事が気になってるって言ってたもんなあ。とんだ豚に真珠だぜ。誠実な所が良いんだっけ？」

アキラはコードに抵触しない程度にワカに接近し、言った。

「コイツな？ 全然誠実な奴じゃねえぜ？ 俺が知ってるだけで何回お前の裸を覗こうとしたか。お前以外も含めたら両手両足の指じゃ足んねえよ。とんだ変態下衆野郎だ？ 前なんか、NPCにわざとぶつかって水の中に落ちて、濡れ透け？ って奴を楽しんだらしい。これでもコイツのことが大切かい？」

アキラの言葉にマルガメが叫ぶ。

「ち、違う。俺はそんなことしてない！ デタラメを言うな！」

「さあどうだかな。犯人つてのは皆否定するらしいぜ。で、どうするよ、この変態とお前の命。どっちが大切だ？」

未だ踏ん切りが付きやらぬワカに、アキラは一押しをする。

「なあ、一回お前の装備が全損して恥かいた事あつたらろ？」

「ええ、そうだけど」

ワカの顔が恥辱に歪む。死の恐怖に際してなお思い出すあたり、酷い思い出のようだ。

「これもこの変態のせいだぜ」

ワカの顔が驚愕に染まる。もしかしたらなにか心当たりがあったのかもしれない。

「まったくとんだ下衆だよな。公衆の面前で下着姿になって恥ずかし

がるお前に興奮してたらしいぜ。理解に苦しむよなあ。好きな女を苦しめるのが大好きな変態だ。そんなのがお前の命に釣り合うのか？」

「アキラはもう一度片手剣を差し出して言った。

「ほら、やれよ」

ワカがアキラの差し出した片手剣を掴み、一步前が出る。そして、剣を振り上げる。

「ほら、早く。なんならカウントダウンしてやろうか？　ゼロまでに殺さなかったらお前を殺すぞ。それ、ごー」

アキラの呑気な声が響く。

「よーん」

ワカの手が力^{こも}が籠る。

「さーん」

「やめてくれ、殺さないで」

マルガメが怯える。

「にー」

「な？　一緒にデートも行ったじゃないか。プレゼントだって一杯した。だから」

マルガメは説得をしようとする。

「いーち」

「だから、頼む。頼むよ」

マルガメは頼み込んで。

「ぜ——」

マルガメの首が飛んだ。

減少していたHPには致命傷だったのか。マルガメの体は爆散する。マルガメの声が聞こえなくなり、あたりは静寂に包まれる。

そんな中、アキラは拍手をして言った。

「いやあお見事。ちなみにさっきのやつデマだけ。服が爆散したあの事件は前しよっ引かれた別の変態の仕業だ。まあ恋人と自分の命天秤にかけて自分選んでるあたり、どのみちクズだったんだろうけどな」

その言葉を聞いてか、ワカはその場にへたり込んでしまう。頭を抱え込んで、ぶつぶつと何かを言っているようだった。

アキラはワカの存在を無視し、私たちに言う。

「そんな訳で、お前らには殺し合いをしてもらう。トーナメントだ。完全決着のデュエルで、降参無し。トーナメントはこつちで決めるぜ」

その言葉に、もはや抗議する者は居なかった。

「んじゃあ一回戦だが、まずはモニカとワルサー。お前らがやれ」

「私が、モニカさんと？」

ワルサーが困惑して言う。

「そうだ。武器はお前らの返してやるから、デュエルで決着をつけろ。もちろん、武器やレベル差で決着が着かない様にフェアモードでな」アキラはこれまた一層楽しそうに笑った。

——クズ野郎が。武器を返した瞬間、そのクソみたいな声を出す喉を斬り裂いてやるわ。

私は内心に決め、従順なように、無言で振る舞う。

そして部下に私とワルサーの武器を渡した所で、思い出したように言った。

「ああすまん、観客が足りなかったな」

アキラが指を鳴らす。すると扉が開き、連れてこられたのは。

「ノンナ？」

紛れもなくノンナその人だった。だが、その目に光は無く、心ここにあらずという様子だった。服装も変わっており、ボロ切れのような布に変わっている。

私の中に怒りがこみ上げて来る。たまらず、私はアキラに叫んだ。

「ノンナに何をした！」

アキラはいたって真面目な顔で説明をする。

「いやな、さつき話題に出した変態野郎。実は俺の部下に居てな。小さい胸のガキみたいな女が好きだったんで、睡眠PKと同じ要領で倫理コードと装備を解除してやったんだよ。あとはまあ、お前の想像通りじゃねえかな？」

「Maledeeto！」

私はアキラに憤怒の視線を向ける。アキラはノンナと戦った時にも使用していた細身の大剣を引き抜き、ノンナに向けた。

「おい待てよ。そんな今にも殺しに来そうな顔をしなさんな。言う事を聞かないと、こいつも一緒に殺す事になるぜ」

まるで武器があらうとなかろうと負ける気はさらさら無いと言った様子で言う。実際問題、武器を持っていようがアキラとの戦いは厳しいだろう。その上ノンナを守ることを考えれば、不可能に近かった。

「そら、お前らの武器だ」

アキラは部下をよこし、武器を取らせる。

「武器を持ったな。どっちからでも良いぞ、始めろ」

私は憤怒を抑え込み、ワルサーにデュエルの申請を送った。

「モニカさん」

ワルサーが困惑した声を出す。

「ごめんなさい。でも、今はこれしか方法が無いみたい」

私は抜剣し、構えをとる。

無論、アキラの蛮行を許すつもりはない。今から無実の人を殺そうとする私も同罪だろう。それでも、私にとってノンナはかけがえのない存在だった。

「ほらワルサー。申請を受けろよ」

アキラの言葉に、ワルサーは毅然と言い放った。

「私は戦いませんよ。人殺しもしません」

「おいおいそれは困る。そうなる俺はノンナを殺さなくちゃならん」

言葉とは裏原に、アキラの声は笑っていた。アキラの言葉は無視してワルサーは言う。

「さあモニカさん。私を殺しなさい。私は殺人者として生きるより、人として死にます。家族には申し訳ないが、血塗られた手で家族を抱くわけにはいきません」

「ワルサーさん……………」

「すみませんモニカさん。貴女を人殺しにしていまいますが、私は自分の命惜しさに人を殺したくないのです。親友の命がかかっている貴方は理由が違う。さあ、やりなさい」

こちらを向いたワルサーの目に迷いはなく、覚悟を決めた表情だった。

きっと、彼は私と2人でノンナを守りつつアキラを殺せるならそうしてくれただろう。だが不可能だ。だからこそ、自分の命を捨てるつもりなんだろう。

「わかりました。貴方の本名を聞いても良いですか？」

ワルサーは頷いて。

「はい、私はマトバと言います。マトバ、セイジユウロウ」

「ありがとうございます。では」

ワルサーは——マトバは決闘申請を受けいれ、あぐらをかいて座った。

そして、私は彼の首に片手剣単発スキル《スラント》を叩き込んで、首を刎ねた。続く数撃でHPは全損し、爆散した。

そして私の頭上に掲げられるwinner表示。それを無視し、私はアキラを睨みつけた。

「すげえ死に様だったな。満足だ」

そんなものど吹く風とアキラは満足げにうなずく。そして部下が寄ってきて、私に武器を渡すように請求する。

「っー」

逆らうこともできず、私は武器を渡した。

こうして、私は無実の人を殺した。

それはこの後も続けられ、私は人を殺し続けた。その中には、マルガメを殺して以来正気が戻らなかったワカも居た。

殺して、殺して。その生活を一ヶ月ほど続けた。

私も無策に日々を過ごした訳ではなかった。ある人物を利用し、アキラを狙うタイミングを作ろうとした。

そして、その時が来た。私とノンナの決闘の時である。

ノンナはずっと観戦役であり、たまにどこかに連れて行かれる立場

だったが、私がトーナメントで他を皆殺しにすると、最後の対戦相手として選ばれたのだった。

こうなる事はある協力者から聞き及んでおり、なおかつ人払いも頼んであり、アキラと部下2人の他は私とノンナだけだった。

そして、私とノンナは武器を渡されて向かい合った。

一ヶ月間話していなかったが、ノンナは無二の親友だとしんじている。きっと私がアキラに攻撃をかけたなら、間違いなく続いてくれるだろう。

そうして私は、申請を送るフリをしつつ、剣を抜いた。

ノンナが話しかけて来る。

「ひさしぶりだね、モニカ」

ノンナのはつらつとした気配は消え去り、虚ろになってしまった瞳に、抱えきれんばかりの悲しみを映していた。

「ええ、ひさしぶり」

なんて声をかければ良いのかわからなかった。子供のように純真だった彼女が、人の欲と暴力に晒されて傷ついていないはずが無かった。

「ごめんね、私のせいで。あの日モニカの言う通りにしてあげれば良かったのに。私ってバカだよ。本当に、何もできない癖にでしゃばって。全部台無しにする。本当に、ごめんね」

ノンナの声は泣いていた。だがもう涙は枯れてしまったのか、涙を零す事は無かった。

「そんな事……」

なんて返して良いのかわからない。私が迷っていると、ノンナはまた話し出す。

「それでね。私、もしモニカと戦う事になったらどうしようって、ずっと考えてたんだ。こんな私でも、誰かの迷惑にならない方法をね」

「ノンナ……」

——ノンナ、また自分を悪く言ってる。自分で思っているより遙かに良いこだって言ってるのに。ここから出れたらまた言っただけなきやね。

そろそろだろうと、私はアキラの方へ駆け出すために重心をずらし始める。大丈夫だ、きつとうまくいく。

「だからね、モニカ」

私の方は準備ができた、後は駆け出すだけだった。

「ごめんね」

その言葉を残し、モニカは自分の胸に槍を突き立てた。

何度も何度も、私が止めに入るより先に、ノンナのHPは全損した。それからのことはよく覚えていない。私はアキラに斬りかかり、いつの間にかカーソルをグリーンに戻していたアキラに傷をつけた事で、私のカーソルはオレンジになった。

3人相手に殺し合いを続けていた先に、血盟騎士団の団員が救援に駆けつけたらしい。

その事すら、私には曖昧だった。きつとどうでもいい事だったんだと思う。

脱出 本質と運命の分かれ道について

「——っていうのがあの事件の真相よ。まあ私の言葉を信じてくれるならね」

事件の概要を聞かされたキリトは悲痛な面持ちをした。他人に対して無関心な態度を装ってはいるものの、やはり根は善良な気優しい性格なのだろう。

「優しいのねキリトは」

不意に心が温まるような感覚を感じる。何かと悪評の絶えない彼だが、やはり世話焼きの人情家という眉唾物の噂ウワサは本当なのかもしれない。

「違いますよ。俺は別に——」

「別に隠すような事じゃないでしょ。今なら何となくだけど、ノンナが貴方を気に入っていた理由がわかる気がするわ」

こうしてみると、キリトは年相応の少年だった。ノンナが生きていればさぞお姉さんぶって世話を焼こうとしただろう。それももう叶わない話だったが、空想するくらいは私の自由だ。

話の流れに不満を持ったのか、流れを切るようにキリトが発言する。

「それで、モニカさんは本当に決闘裁判に挑むつもりなんですか？」

「当たり前よ、負けるつもりもないわ」

その言葉に、キリトはまた眉を潜める。

「大丈夫なんですか？」

「何が？」

「人を殺す事が、です」

納得がいった。つまりキリトは決闘裁判で私がアキラを殺す事について、もしくは事件の内容を語った際に話した殺人経験について聞いているのだろう。

「別に、当たり前前だけど人殺しは嫌なことよ。やってはいけない事。それでも、あいつらが現実に戻って無罪放免になる可能性が少しでもあるなら、私はあいつらを皆殺しにするわ。その事が現実でも報道さ

れば、きっと私は大量殺人犯の仲間入りだし死刑になるでしょうけど、もうほとんど身内も残っていないし丁度いいわ」

——確か私、キバオウに『法に基づかない裁きを受ける気はない』みたいな事言わなかったかしら？ 思えば馬鹿な話ね。自分が私刑を執行する気でのいるのに、他人には口八丁で誤魔化すなんて。ノンナが見たらなんて言うかしらね。

「この件が終わってから、レッドプレイヤーを殺すつもりですか？」

キリトの質問に、私は即答する。

「無論よ。考えてみれば遅すぎたくらいだわ」

キリトはまた悲しそうな顔をする。そして慎重に言葉を選んで私に言った。

「この件が終わったら殺人から手を引いてください。身勝手な事だっというのは分かっています。それでも貴女は復讐を果たしたら殺人に手を染めるべきじゃない」

「どうして？」

私は疑問を呈する。キリトの言っている事が理解できない訳ではない。彼は私が殺人者として罪を重ね続ける事を良しとしなかったのだろう。だがそれは、あまりに非効率な物に思えた。

「どの道レッドプレイヤーどもが罪なき人を襲う限り、誰かしらが殺人の罪を背負ってあれらを殺さなきゃいけないわ。だったらもう何人も人を殺してる私がすべきよ。新たにSAOで殺人を経験してしまふ善良な人間を作るべきじゃない。優れたプレイヤーにトラウマを生むような損失があつてはいけないわ」

キリトは真剣な顔になつて言う。

「違いますよ。俺は単に、貴女みたいな優秀なプレイヤーがPVPに明け暮れて攻略に関わらないなんて事態を防ぎたいだけです。現状、槍以上の射程でメインダメージソースとして運用できそうなのは、貴女の《手裏剣術》だけです。それを活かさない事こそ損失じゃないですか？」

一理ある理論だった。おそらく道德面からの感情も混じつてはいるのだろうが、これもまた無視できる問題ではなく、私の心情にも――

——ノブレス・オブリージの理念にも合致する物だった。

それでも、不可能な話だった。

「キリト、例えば軍隊にも憲兵がいるように、組織としては戦う以外にもしなくちやいけない事があるのよ。無論、私がやっている事はただの殺人行為で、反対する人に殺される覚悟くらいはしているわ。でも、誰かがやらなくちやいけないのよ」

私は一呼吸を空けて言う。

「貴方自身も含め、攻略組の人々はアインクラッドに囚われた人々を解放するための大切な宝よ。それになろうとする人もまた同じ。そんな人達を殺してしまった以上、私はそれ以上の対価を示すべきなの」

キリトはため息をつく。説得は不可能と感じたようだった。

「わかりました。それでも気が変わったら、いつでも言うってください。貴女の事を偏見なしに見てくれる人たちのアテはあります」

「そう、わかったわ」

そう言つて、私は手元を見て暫し待つ。しかし何も現れなかった。

「どうしたんですか？」

キリトが不思議そうに聞く。

「フレンド申請が来てないわよ？」

「フレンド申請？」

キリトがおうむ返しをした。

「フレンドにならないと階層越しの連絡はできないはずじゃないの？」

「それはそうですけど」

キリトは何やらためらっているようだった。

「ああ、確かに私みたいなのと関わりがあると思われるのは、信用上よろしくないわね。アルゴに手紙を持たせればいいかしら？」

「違いますよ。単に少し驚いただけです。女性がこんな簡単に連絡先を教えていい物なのか、と思いましたがね」

少々嫌味を含んだ口調。これが素なのだろうか？ 嫌味には一言ある私だ、ぜひ返させてもらう事にする。

「あら別に、男性にはそう軽々しく連絡先を伝えた事はないわよ。その枠に入らない愛らしい子は警戒対象じゃないもの」

「は？ 今なんと？」

キリトが若干怒りを滲ませた顔で、可愛らしい女性のような顔立ちを苛立ちに歪ませながらこちらを向く。嫌味と言うには少々直球すぎたが、まあ通じたしよしとしよう。

「貴方のこととは言っていないわよ？ 自身が魅力的と信じていらっしやるなら、私が貴方に気があるとしても考えれば良いのではないかしら？ そこは個人の自由よ」

思わず浮き出た笑顔で私は言う。キリトはそっぽを向いてしまった。

その後私たちは無事に洞窟を脱出した。入り口の所ではダニエーレが待機しており、合流する事ができた。

†

「色々とありがとうね。後日お礼の連絡をさせてもらおうわ」
「ええ、わかりました」

モニカが礼を言って立ち去る。これで再びキリトは1人自由の身となった。そんなキリトの脳内に浮かんだのは、モニカの人間性だった。

——奇妙な、もとい不気味な人だったな。

キリトの初対面のモニカの感想は、プライドと警戒心が強く、冷徹な重装備の片手剣使いという印象だった。だが、今日会話してみれば、感情を理解し、冗談や皮肉を口にする。普通の感情を備えた、むしろ面倒見の良さすら感じさせる人だった。

だからこそ、キリトは酷く奇妙に感じたのだ。

モニカの口から復讐の言葉が出てこない事に。

思えば当然のはずなのだ。モニカの境遇から考えれば、犯人に怨嗟の言葉を吐き、自身の殺人を復讐と正当化しても何らおかしくないはずだ。

それがどうだろう。モニカは自分を殺人鬼と俯瞰して評価し、復讐に関してもただの殺人行為と蔑むような言い方をする。自身の行動

を正当化しようともしない、不気味な言動。

見方によつては、自分の行動を言い訳しない潔い性格にも映るだろう。だがキリトにとってはそれとは別の、もつと異質な存在であると感じた。

まるで、そこには事実しか存在せず、情緒的な概念を存在しないものと扱っているような、鉄の理念。それを感じざるを得なかった。

復讐は所詮、皮を剥けば私刑に過ぎず、それは人殺しの相手と同じ土俵に落ちる事である。その思想は理解できる。なにせキリトは復讐の当事者ではないからだ。事実を俯瞰できる位置にいるからだ。

それを当事者の、親友を犯され、殺人を強要され、屈辱的な汚名を着せられたモニカ自身が言う事だろうか？

これがまるで情を理解しない、破綻した人格の持ち主であれば納得がいく。だがしかし、モニカは情を理解し、笑顔を浮かべ、冗談を口にする。そんな普通の人である。

その乖離が、分裂した人間性が、キリトには不気味に映った。

だがキリトはモニカを嫌いになる言葉でしなかつた。むしろ好印象さえ抱いてしまっていた。

モニカはああこそ言つてはいるものの、事件の内容を話す彼女の淡々とした口調とは裏腹に、その表情は非常に悲痛で、抱え切れないほどの悲しみと痛みを感じさせるものだった。

酷い理不尽で、愛する仲間や居場所を失った。キリトもまた同じ境遇である。いやむしろ、居場所を失いたくがないために破滅に導いたキリト自身より、モニカの方がよほど悲惨ではないかと、キリトは思ってしまった。同じ傷を抱えたもの同士の同情を、抱いてしまったのである。

故にキリトは、しばらく考えた後にモニカにメールを送る事にした。

「貸しを返す気があるなら、協力する準備はある」

そういった端的な内容のメールであった。

異常 愛に理由がないように……………

コーヒーは良い。その存在は、私にとっては人類が生み出した三大発明以上の発見である。香りもよく、良い豆が良い腕で煎られたコーヒーを頂くのはまったくもって至福のひと時である。

だが、SAOに、浮遊城アインクラッドには私を満足させるコーヒーは無かった。思えばこの世界に囚われて以来、一番不満を口にしたのはコーヒーの不在だったかもしれない。

無論、現実^{リアル}の料理もどきが存在するように、当然コーヒーもどきも存在する。だがしかし、所詮はもどきである。コーヒーの摂取できないこの日々は、私に堪えがたい渴望を抱かせていた。

今一度、本当に美味しいコーヒーを飲み、友とそれを分かち合いたい。

分かち合う友の亡き今、その願いは果たされる事は無いのだろうが。

そうして私は今日も今日とてコーヒーもどきを飲む。今の私の姿を見れば、さぞや陰鬱に映るだろう。もしくは苛立っているように見えるかもしれない。

「はあ」

ため息が漏れる。やはり、やるせない気持ちは隠せなかった。

「すまんなあ、モニカさん。SAOでの再現じゃこれが限界だよ」

不機嫌そうな私を見かねてか、この店の店主であるアフリカ系の巨漢、エギルが声をかけてくる。

「いえそんな、飲み物の事で機嫌を悪くしていたわけじゃないですよ。私はなるべくの笑顔を浮かべてエギルに言う。店と言ってもカウンター席しかない露店だ。そんな距離の近い空間で機嫌の悪そうな客が居たら気にもするだろう。ましてそれが、現実での知人であったなら。」

私の返答にエギルは逡巡^{しゆんじゆん}し、言いにくそうに口を開いた。

「その、ちゃんと飯食ってるか?」

「食べてますよ、その辺の資金も融通してもらえるのでありがたいで

す」

結局のところ、食事の代金などはダニエーレが有無を言わず渡してくるようになった。曰く年長者は年少者に飯を食わせるもの、この事だった。

「そうか、そうならいいんだが」

エギルはそう言って沈黙してしまう。

もしかしたら私は邪魔なのだろうか？ 思えば狭いカウンター席とは言え、あと数人は来ても良さそうだが、どうしてか人は来ていない。私が客足を遠ざけているのかもしれない。

「大丈夫ですよ、コーヒー一杯で粘ったりしません。待ち人と合流したら別の場所に向かいます」

「違う、別に出て行って言ってるわけじゃない。今日はPC・NPC問わず客が入らないように貸し切り設定にしてあるんだぜ。むしろ用があるなら俺が出るからここですませた方がいい。特に、人目を気にするような事ならな」

エギルはそう言って店のステータス表示を私に見せる。たしかにこの店は招待限定になっていて、他の客が入れない。密室になるように設定されていた。

「察しが良いんですね」

—— 本当に聡い人。やっぱりエギルさんは誤魔化せないわね

「まあバーの店主も兼ねてたからな。人の悩みを見抜く自信はあるもんさ」

「店を集合場所にして良いか聞いたただけなのですか？」

「現実でも俺を頼るときって言うのは、大概が込み入った事情を抱えている時だろ。まして、決闘裁判なんかに巻き込まれるってなれば、後ろ暗い事もあるだろうよ」

私は凶星だとばかりに軽く手をあげる。まるつきり凶星で、大手を振って会えるような人物ではないからこそ、秘密を死んでも守るだろうエギルに協力を頼んだのだ。

私がまだ現実にはいた頃、ノンナと喧嘩した程度の相談から、私が乱

闘騒ぎを引き起こしてしまった時まで相談に乗ってくれた人だ。正直な所、祖国にいる資産目当ての親戚もどきより、エギルの方がよほど親身になってくれる相手だった。

そんなエギルが、苦い口調で私に言う。

「なあ確認して良いか？」

「何ですか？」

「決闘裁判を今からでも辞退する事はできるのか？」

その言葉に私ははつきりと、断定する口調で答える。

「できません。それに、しませんよ」

エギルは眉間を押さえ首を振る。

「まったく、その頑固さは変わらん。乱闘事件起こした時も、もう少し自分を大切にしろと言ったはずだぞ」

「あれは警察を呼ぼうとしたら、相手が私も取り押さえようとしたから殴り返しただけです。殴り込みに行った訳じゃないですよ」

「その結果、腹と額に何針も縫う傷を作ってノンナが大泣きしたのを忘れたのか？」

「っ！」

その名前を聞いた途端、寂しさと喪失感が胸に渡来する。私が傷つくと泣いてくれる彼女はもういないのだ。

「すまん。言葉を間違えた」

私の感情を察してか、エギルが謝る。私に注意する時、ノンナの名前を持ち出すのはエギルの癖だった。

「いいえ、気にしないでください。確かにあの事件は酷いものでした。ですが、ノンナを居ないものの様に扱う気は私にはありませんよ。要らぬ心配をかけてすみません」

私はまた笑みを浮かべる。するとエギルは、深いため息をついた。先ほどまでとは違う、どこか粗い、怒りの空気を漂わせたものだった。『なあモニカさん。いや、モニカ。ここからは英語で話しても良いか？』

『もちろんよエギル。それでどうかしたの？』

エギルが英語で会話しようと言うのは今までもそれなりにあった。

時に公言できない内容を話す時、もしもの盗聴に備えて英語で会話する事が多かった。敬語でないのは、本心を話してほしいからだと言いは依然言っていた。

それ故に、ここからは大切な話だと言うことなのだろう。

エギルはどこか、聞き分けの悪い子供を叱る様に言った。

『まだ無茶を続けるつもりなのか？』

『無茶？ べつにしていけないわよ』

身に覚えのない言葉だった。その反応を半ば予想していたのか、言葉が続ける。

『聡明なお前ならわかるだろ。今までのお前の行動のどこが無茶じゃないって言うつもりなんだ？』

『だから無茶なんてしてはいないわよ。できる事をやってきただけよ』

私の返答に、エギルは盛大にため息をついた。そして言葉が続ける。

『じゃあ聞くが、お前にとって暴漢に刺された傷を自分で、市販のソーイングセットで縫うのは無茶じゃない、いたって普通のことなのか？』

内心、過ぎたことをほじくりかえすのはどうかと思っただが、恩義がある彼の話なので付き合うことにした。

『いたって普通とは言わないわよ。たしかにあの時はノンナにも貴方にも怒られたけど。あれは処置に有効な事で、私にとってできる最良の行動だったのよ。問い詰められる様な事じゃないはずよ』

少しばかり救急車が来るのが遅れそうな路地だったので、私は仕方なくノンナの持ち歩いていたソーイングセットで止血したのだ。本当は熱湯で器具を消毒したかったのだが、あわや失血死という状況ではそれも言っていられなかった。

私の回答に不満があったのか、エギルは苦虫を噛み潰すような表情になってしまう。

『じゃあ、親友を失って、人を何人も殺してしまって、他人から心ない言葉を投げかけられて。その上で事情を知らない大人たちに殺し合いをさせられて、それを拒否しないのは無茶じゃないって言うのか』

？』

『無茶じゃないわよ。悪評なんて今は関係無いし、事件の犯人が罰せられる可能性のある状況なだけまだマシだわ。それに、私はもう成人してるわよ。子供という訳じゃ無いわ』

エギルの表情が険しくなる。

『じゃあその上で、近しい誰かや、知り合いを頼ろうともしない事もか？』

『べつに協力者はたくさんとは言わないけど、理外の一致した協力者は居るわ。貴方の協力にも感謝しているし』

エギルが髪のないスキンヘッドの頭を掻き筆る。

『じゃあ、これだけの悲劇があつて、理不尽があつて。一度も辛いとき言を言わない事もか？』

『泣き言を言つて事態は好転しないわ。辛い苦しいと言つて神様が慈悲を下さるとでも？ 神は自らを助くる者を助く、よ。そんな事は誰でもわかる事だわ』

『いったいエギルはどうしたのだろう？ 私が辛いと言うことを心配したいようだが、私は一切問題無い。四肢はあり、思考も正常、睡眠は多少は浅いが行動に影響を及ぼす訳では無い。』

まあ人情家のエギルの事だ。きっとノンナの死を悲しんでくれているのだろう。それが私の今後に影響しないか、とも。相変わらず心配症な人だった。

『それで？ 質問は終わりでいいのかしら？』

私の言葉に、エギルはかぶりを振った。

『じゃあ最後に、辛いと思つて辞めようと思わない事は無茶じゃ無いのか』

『無茶じゃ無いわよ。たしかに今は辛いけど、さつきも言つたように辛いから、というのは物事を投げ出す理由にはならないわ。まだ動けるんだもの、できることをするべきよ』

『お前はそれを、本気で言っているのか？』

『さつき最後つて言つたじゃない。まあ、本気で言っているわよ。貴方に嘘をつかないわ』

その言葉を聞いた瞬間、エギルはドン！とカウンターを叩くと、やるせないような、やりきれないような口調で言った。

『店を開ける。飲料は各種入れてあるから好きなように飲んでくれ』
『ちよつとー』

私が止めるよりも早く、エギルは露店を出てしまう。待ち合わせがある以上、私はここを動けなかった。

「エギルらしくないわね。どうしたのかしら？」

私はそう独り言をし、コーヒーもどきに口をつけた。

†

エギルにとって、それは最悪な事だった。嫌な予感が的中してしまったのだ。

しばし駆けて、噴水のある広場に腰を落ち着けると、エギルは頭を抱えた。

「クソッ！」

思わず悪態をついてしまう。それも仕方のない事だった。ノンナが——陽毬ひまりが危惧していたノンナの精神性。感受性に長ける陽毬の観察眼は皮肉なほど正確にモニカの内面を理解していたのだった、エギルはその突拍子もない性質に、その時は気にしすぎだと陽毬を諭したが、いよいよもって現実味を帯びてきた。

「こんなどうすりやいいんだよ。このままじゃアイツ——」

恐ろしい予測がつく、それはモニカの合理性に偏重した考えに対する物であったが、危惧はまた別のものだった。

「もしも〜し。大丈夫ですか？」

成熟した色香を放つ声がエギルの鼓膜を震わせる。顔を上げたエギルが目にしたのは、声の妖艶さとは真逆に小柄な少女のような人だった。

「直接お顔を合わせるのは初めてね、エギルさん。私はマリアよ。以後どうもよろしくね？」

少女というには場慣れした所作でマリアは微笑み、礼をする。エギルにとって、マリアと言う名前は覚えがあった。

「アンタが今日、俺の店で待ち合わせをするっていうマリアさんか」

「ええそうよ。私があの子の協力者よ」

そう言つてマリアはまた微笑む。少女のような純粹さと大人の妖艶さが入り混じつた魔性の笑顔だった。

「そうか、俺の店はあっちにある。早く行つてやつてくれ」

エギルがそう言つと、マリアは上品な所作で笑つた。

「ええ、知つているわよ。私がおりにいるのは貴方を追つてきたからよ」

「俺を？」

「誠実な人柄で知られるエギルさんが、お得意先の客を置き去りにして駆け出すのなもの。きつと、何か一大事が発生したに違いないと思つた次第でね。事情を聞いてもいいかしら？」

マリアは目を細めて笑う。その笑顔から、エギルはどうにも聞くまで返さないという雰囲気を感じ取つたが、モニカの事情である手前、踏み込んだ事は話せなかつた。

だが、協力者である以上、モニカに関われる立場である以上、言つておいて損はないだろう。

「アンタ、秘密は守れる質か？」

「ええもちろん。あの子の秘密は独り占めにしたいくらいよ」

どうにも頓珍漢な答えだが、エギルは踏み込んだ事は避けて話すことにする。

「そうか。じゃあ単刀直入に言わせてもらおうが——」

エギルは胸中にある無念を晴らすつもりで、口にする。

「モニカはこのまま止まらない。アイツの思う『正しさ』に向けて邁進するだろうさ。臆病で繊細な内面性に気づかないまま、な」

「どういう事かしら？」

マリアが首を傾げるが、モニカの内面をあれこれ言いふらすわけにもいかないの、続けて要件を言う。

「だからアンタにもモニカを止めてやる手伝いをして欲しい。どういう理由で協力するのかはわからんが、止めて損は無いだらう」

「？」

マリアがまた首を傾げるが、エギルは構わずに言う。

「詳しい要件は、モニカに『さっき何があったのか』とでも聞けば理解できる。さあ、行つてやつてくれ」

「もう、つれない人」

マリアは一礼すると、待ち合わせの店に向かう。

その背中を眺めながら、エギルは独り言を言う。

「辛いからって止まる理由にならない？ 冗談じゃない。それが親友の無事を聞いて大泣きする女の言葉かよ」

エギルは酒に酔いたい気分であったが、この浮遊城アインクラッドでは、コーヒートの香りと同じく、アルコールの酔いは失われていた。

殺人① 死について回るもの

「で、なにか成果はあった?」

「んもう、相変わらずつれないわねえ。貴女の為に苦労したんだからもつと褒めてくれてもいいんじゃないの?」

ここは変わらずエギルの屋台。エギルは走り去ってつきり戻らず、入れ替わりで来たのがこの女、マリアだった。彼女は私の右隣に座った。

「金は払ったわ。対価を求めるのは妥当な話よ」

「私が欲しいのはお金じゃなくて愛なんだけどなあ」

そう言って、相変わらず子供っぽい容姿に見合わぬ艶やかな笑みを浮かべる。

「アキラを殺した後なら私の体くらいくれてやるわ。だからさっさと話を進めなさい」

「そんな体だけが目当てみたいない言い方……まあいいけどね。はい、これが一覧」

そう言って差し出されたリストは、プレイヤーネームと性別が並んでおり、その横にはチェックマークが書かれている欄と書かれていない欄があった。

上はアキラから続き、中にはマリアの名もあった。2人の名前の横にはチェックマークはつけられていた。

「ん。仕事が早いわね。逃したやつは足取りはわかる?」

「私は優秀だからねえ。ちゃんんとまとめてありますよ」

マリアは別の紙束を取りだし、私に手渡す。

「ちゃんんとあの事件以来の足取り、人間関係、潜伏地域まで書いておいたわ」

「そう」

私は適当な返事をして紙束をめくる。そこにはあの事件、アキラ一味による監禁PK事件の、その後の足取りを調べ上げたものだった。

「このリストにないやつはどうしたの?」

「殺したわ。たあーつぷりと苦しませて後悔させながら、貴女の代わ

りになるくらいにね」

そう言つてマリアはウィンクをする。

「そう」

「何だつたらその時の追い詰めるまでの経過とか書いてあげましょうか？　こう見えて記憶力いいんだから」

「別にいらない。死んでいればそれで良いわ」

「ドライねえ。まあそんな所もカツコよくて好きだけど」

マリアは私の太ももに手を置く。そのまま顔を近づけて来る。

「何？」

「いやね、私の処分はどうすのかなーって。気になっちゃって」

「だからって顔近づける必要はないでしょ」

「憎き仇かたきを前にすれば殺してくれるじゃないかなーと思つてね」

マリアはまた笑う。私は理解のできない思考回路にため息をする。

「はあ、だつたらあの事件の時、抵抗しなければよかつたじゃない。そうしたら私はちゃんと殺してたわよ」

「それとこれは話が別ですー」

マリアはそう言つと、私から離れて立ち上がった。

「それじゃ。渡すもの渡したから、名残惜しいけど帰るわね。じゃあねー」

そう言つて立ち去ろうとするマリアに、ぞんざいな口調で私は言う。

「さよなら、アリサ」

途端にマリアは180度振り返り、私の肩を掴む。

「もおーマリアで良いわよモニカちゃん。ちゃんとプレイヤーネーム明かしたじゃない。なんで呼んでくれないのよお」

「別に深い意味は無いわよ。そう呼びたかっただけ」

「えー。プライベート中に仕事の名前で呼ばれるのやだなあー」

「それを言うなら今も仕事でしよ。金の前払いもしてあげてるんだから、さっさと仕事に戻りなさい」

「えー。体の前払いも大歓迎なんだけどなあー」

「今から手首でも切り落とせば満足する？」

「そんな猟奇的なプレイはちよつとお」

「マリアは再び屋台を出ようとしたが、再び振り向き、言った。

「モニカちゃん、追加報酬ってお願いできる?」

「可愛らしい仕草でねだるように言う彼女に対し、私は再びため息が漏れた。

「いくら欲しいの?」

早くこの会話を終わらせて次の予定を消化したい私に、マリはは満面の笑みで言う。

「お金じゃなくつてえ。心が欲しいな」

「は?」

「心、ハート。愛でも良いけど」

「聞き返さないわよ」

私は内心頭を抱える。協力者としては抜群に優秀なマリアだが、正直理解が及ばない面が多かった。

「概念上の物が報酬として確約できると思っているなら、私は協力者の選定を間違えたわね。今からでも他を当たろうかしら」

「んもお。こういう時は適当に領いとけば良いのに」

「報酬が払えないと契約が成立しないでしょ」

呆れてマリアの方を見もしなくなった私に、マリアは言った。

「だからね。もしモニカちゃんがアキラを殺したら、私を愛して——」

「マリアは少しためらうように間を開けて。

「私を殺してね」

言葉を言い切る否ややマリアは立ち去る。最後の言葉を言った時の表情を私は見ていなかったが、彼女に似合わず、ひどく暗い声だった。

†

エギルの店での一件から数日後。私達は再び42層の夜空の洞窟に来ていた。

「あの時は悪かったわね。私が穴に落ちたせいでまともに素材回収できなかったでしょ」

私の言葉をダニエーレは大きく首を振って否定する。

「いやそうでもない。まだ知られていないトラップを見つけられたのだ。あれは全く僥倖うまいと言えるだろう。少なくとも、我が血盟騎士団の団員は被害に遭っていない。それだけで価値があったというものだ」

「そう言ってくれると嬉しいわ」

そう、私が以前この洞窟に来た時、無様に罠にかかり大穴へと落下してしまい。素材も取れぬまま1日を浪費してしまったのだ。

二刀流スキルの存在や、キリトへ協力を得られるようにはなったが、それはそれとして素材は必要である。なのでこうしてダニエーレに素材収集を手伝ってもらっているのだった。

「よし、着いたな」

今度はトラップにも引つかからず、私たちは分担して採掘を開始する。

ここはモンスターも沸かないらしく、順調に採掘を行った。ダニエーレが今日のところはここで切り上げようと言い。帰還の準備を進めていた所、ある一団が近寄ってきた。

〈アインクラッド解放軍〉の制服、鎧を身につけた3人組である。1人は幼い少年で、2人は成人男性のようだった。

「おっと、その御三方。どういった御用ですかな？」

ダニエーレがおどけたような口調で喋る。裁判の時と同じく、身内以外にはあの態度なのだろう。

「どけ！ 用があるのはその女だ！」

成人男性の片方が怒鳴るように言う。

「まったく、貴方達は礼節をご存知ないのですか？ 名乗りもせず淑女をさしてあの女呼ばわりとは。そちらのギルドのお苦しい状況はお察し致しますが、あまりに野蛮ですなあ。二大ギルドと呼ばれはすれど、落ちぶれたものです」

「なんだとー！」

男は激昂してダニエーレに掴みかかろうとしたが、もう1人がそれを抑える。服の装飾からしてリーダーだろう。

「待て。血盟騎士団と争いにきたんじやないだろう。ダニエーレさん部下の非礼を詫びます。俺たちはその、モニカに用があるんです」
「はて。あの一件に関しては決闘裁判で手を打つとそちらのキバオウ殿と取り決めをしたはずでは？ それ以外の要件であるか？」

「いえ、あの件に関してのことですよ」

男はそう言うと、少年に発言を促した。すると少年は、私に向けて震える声で言う。

「おい殺人鬼！ 僕と決闘をしろ！」

「ああ、遺族の方ですか？」

私が少年に近づく。するとダニエーレは自分がかすむから下がっているそばかりに視線を送ってきたが、無視した。

「そうだ！ お前に父さんを殺されたんだ」

「そうなんですか。お父さんのお名前をお聞きしても？」

「ワルサーだ！ 聞いたことあるだろう」

「ああ、ワルサーさんの」

私は納得する。

「お父さんの本名は言えるかしら？」

私が質問をすると、少年は苛立った。

「疑ってるのか」

「質問よ。ただの」

少年は私の態度が気に食わないのか、歯を食いしばって言う。

「的場清十郎だ。それがどうした」

「ええそうよね。知ってて当然だわ」

私は頷く。そして少年に、先ほどと同じ口調で言う。

「ねえ、じゃあもう一つだけ質問していい？」

「なんだよ」

少年は苛立っているが、聞いてはくれるようだった。

「そうね、じゃあ聞くけど——ワルサーさんってSAO内に家族がいないの知ってるかしら？」

瞬間、リーダー格の男は抜剣し、私に斬りかかった。